

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十二年一月二十五日印刷
昭和四十二年二月一日發行（毎月一日發行）
（第一七号）

川柳塔



No. 17

特集・処女作とその頃

二月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本 盛



超特撰

(化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、三、〇〇円

清酒

日本 盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



神経疲労回復剤！

バランス



山之内製薬株式会社

東京都中央区日本橋本町2ノ5
大阪・福岡・札幌・名古屋

神経も

レジャーがほしい！

- はげしい頭脳労働のため、思考力に疲れをお覚えの方
 - お仕事と思うようにゆかなくて、イライラしておいでの方
 - 重要な交渉、商談などをひかえて不安なお気持ちの方
- ぜひ、バランスをおのみください。



● 一〇ミリグラム	二、〇〇円
● 六カプセル	三、〇〇円
● ニカプセル	三、五〇円
● 三〇カプセル	八、〇〇円
(はかに医薬品大人)	
● お申し込み説明書・試供品を 送呈	

尉は古稀媼は還暦わか緑

古稀の朝これからを本番の顔となり

自虐きびし七十年を棲みなれて

人生の賽ころの目などあわてまじ

瑞川氏夫人の死を悼む

聞こえますかこれが男のすすり泣き
男ありて遺影のぬくみ抱いて耐え
寂しさの底にくつきり宿るもの

今月のことば

◎果報は寝て待てという諺がある。新年が来ようが、花が咲こうが、気にしない、気にしないという人がある。

◎他の人からは、ほんとうに気の毒に思える程に、人生をむなしく暮らしているようにさえ見える。

◎しかし、ご本人は必ずしもそうではない。

他人からたとえ忘れられようが、気の毒がられようが、むしろそんな事は迷惑千万である

◎この人にとって、幸福とは、こちらから追



いまわして求め得られるものではないことをよく知っている。それどころか幸福というのは追いまわしてばかりいると却ってとり逃がしてしまうものだということも知っている。幸福とはいつとはなしに、知らぬ間に心にみちて来るものだということも知っている。

◎M.C.C.の晩酌に目刺しがあれば、わが世の春である。

◎たった一つ。一日も欠がしてならぬものがある。それは白梅に似た、詩の香りである。

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……………(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

★処女作とその頃……………(22)

——同人特集——
小畑自由郎・大西八歩・吉田水車・正本水客
麻生アート・川村好郎・若本多久志・西尾 栗

近 詠……………麻生 葭乃……………(19)

織 田 信 長……………(川柳戦国志・七)……………富士野鞍馬……………(40)

秀 句 鑑 賞……………(前月号から)……………後藤 梅志……………(27)

川 傍 柳 初 篇 研 究……………(四十四)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清 博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須啞三味・丸 十府・岡田 甫・

大 同 の 石 仏……………(大陸放浪)……………東野 大八……………(30)

い の ち ある 句……………戸 田 古 方……………(39)

痴 盲 録

秋田実先生を迎えて

高 鷲 亜 鈍 (19)

柳 樽 と 義 経

不二田 一三夫 (42)

真鍋 一 瓢 君 逝 く

吉 田 水 車 (29)

雅号ぶつちやけばなし

若 柳 潮 花 (47)

た わ ご と

川 岡 靈 眼 子 (57)

近 作 柳 樽

川 端 東 雲 楼 (41)

大萬川柳「早熟」

入選発表

若本多久志選 (32)

初 歩 教 室

清 水 白 柳 選 (50)

★ 柳 界 展 望

菊 沢 小 松 園 (44)

★ 本 社 一 月 句 会

（庸 佑） (54)

★ 各 地 柳 壇

（文 秋） (59)

一 路 集 「ストーブ」

宮 口 笛 生 選 (48)

「婚約」

松 川 杜 的 選 (49)

★ 編 集 後 記

白 柳 ・ 一 三 夫

(64)



中島生々庵選

富田林市 川端東雲楼

どこからか焼芋匂う満員車

金策がなり木枯をまつしぐら

妥協々々で堪えぬいてきた根性

研ぎたてのかみそりピタリ散髪屋

亡妻一周忌

も一度と思いつづけて一周忌

何の因果か年こしの一周忌よ

大阪市 金井文秋

宗旨まで変えて見る程気が弱り

メニューの値はお替りをさし控え

愛きようが無くて勤まる貸付課

消極に生きてなかなか芽を出さず

負け嫌ひ寄って小さなブーム来る

無いものはたずねあるのは値で買わず

大阪市 後藤梅志

拾い屋も野良犬も居ず年の暮

悪人に天罰のないもどかしさ

木津川の渡船にタフなおなごはん

「川柳と翻訳」出版

川柳の夜明け名句をよこに読む

明治回顧二句

御召列車の出るプラットに水を打ち

吾妻橋から桜が見える川蒸気

豊中市 戸田古方

それだけの用にぼつぼつなりそうで

うしろから石駄せつたきこえてくる寒さ

鬼夜叉があるひ仏にみえてくる

足るを知る日向の中にいるぬくみ
ひとさまの眼があさましとおっしゃった

大阪市 正本水客

二ヶ月三月忘れることの有難さ

職を去る弁うしろ暗さはなしという
夫婦とも愚にかえる幸せ持ちあわせ
言訳けがあるかと言訳け聞かない気
世話好きで通り家では気むずかし

大阪市 吾郷玲人

ゼンマイを巻かれて亭主動き出し
まんまるい月の気付いた十二月

ヒマ人に捕っているセールスマン
お邪魔ですがといきなり邪魔な客
寒い朝落葉が何か囁いた

岡山県 浜田久米雄

よく歩く足だと思う十二月

駅伝のただ目の前があるばかり

ヘルメットかぶる免許をとって来る
信じてるしょうこ電話もかけて来ず
誰も来ぬ日は郵便も通り過ぎ

高槻市 若柳潮花

三味かけて色紙をかけてひとり住み

下戸も出て深川節へ輪をつくり

光輪氏出演香をり会より

名披露目の春日へ堀も駆けつける
背広着た膝で小唄の三味を弾き
手をたたくだけに並んだかぶりつき

明石市 家沢薺花

大根と葉っぱ別れの時が来た

幸運と不運との差は駅一つ

隔世の感広重のマツチ見る

運転手フェリーボートで客となり

お客さまと言う程でなし里の母

青森市 工藤甲吉

青立ちの稲 捧げ銃する姿

大臣の掌にころげない不稔粒

スーツケース凶作村をあとにして

氷雨してみちのくひとはもの言わず

たばこ店がピースの人とみてくれず

大阪市 橘高薫風

厄年の山照りながら海曇る

中之島剣先は寂 十二月

一旦は筆をおいたが十二月

ベトナム遠し子のピストルに斃れる真似

葉牡丹を植えればその夜細雪

ハワイ 築山快夢起

クレヨン画烟りは汽車より太く描き

兎も角も話題の人となつて逝き

然るべく法螺も交えて視察談

買物のたびに円価に換算し

サンプルになった積りで見合する

神戸市 仲 どんたく

土京

宮城をスモッグ墨絵に描いて見せ

長崎へ

あたたかさ雲仙霧氷見そこない

おろろんばい おろろんばいと更けて行き

思い出の地獄に立って一つ撮り

弔辞より遺族頼むと黒い梓

布施市 久米奈良子

小さなしあわせなかなか寝つかれず

女坂いくつ越えたら辿りつく

ふせぐだけふせいだあとの隙間風

プライドも理性もある日邪魔になり

ペン先で心の機微をつつかれる

布施市 本多清人

カムバック職場のみんなに励まされ

嫁かす娘があつて年忌を繰上げる

捻挫したその体重を笑われる

結婚記念日近し

あの頃の妻はモンベの似合う人

計画が狂い女の子ばかり産み

高槻市 傍島静馬

十二月思わぬところから取りに来る

折込みの数が師走を焦立てる

来賓席水と油が列ばされ

ばけ出して長生きそろそろうとまれる

実際に要る前借に気がねする

小松市 関戸宗太郎

出したほど賀状が来ない平社員

童顔を想い浮べて読む賀状

初詣で一番乗りの雪を踏み

未亡人宛の賀状が急にふえ

九州の汗をテレビで観る炬燵

京都市 都倉求女

やっとその気になったら勧誘員が来ず

冬空へまだ肩いからせて大銀杏

まだ残る紅葉へ山も待ってやり

金を吸う掃除器に似て百貨店

三疊の温みはやかんの湯気で足り

鳥取県 森田布堂

竹の雪溶けて陽に散る素晴らしき

噴水の位置が変わった風の向き

へそくりの利子で飲ませて飼育する

ねだられて猫と刺身を分けて食ひ

干し柿の障子にうつる影たのし

大阪府 不二田一三夫

目に縄を通され乾物屋に売られ

女みな一度は花にたとえられ

ポーナスラッシュ 夫の汗のあわれなる

もろざしが芸術という鶴ヶ嶺

板垣さんボッケに二枚 どこへ行こ

岸和田市 内藤きさ子

こんにゃくはむごい目に遇う針供養

病人の乗り気へこよみ持つてくる

焚火の好きなおばさんが死に寒い冬

シヤボン玉売りの笑顔も売れている

大阪府 市場没食子

ホステスの媚びるエクボを指で押し

デパートも高い送料に気兼ねをし

せめてものぜいたく長湯してのぼせ
ルンペンになりたてと言う皮膚の色

出雲市 尼緑之助

李下の冠突風は遠慮せず

まとまらぬ話猫まで追い出され

低いのも高いのもいる自衛隊

日本は歌ってばかりいるテレビ

京都市 大鶴喜由

女が男をまかす芝居だ見に行こう

遊ぶ気と結婚する気折れ合わず

誠意とは言葉の外に物をたし

凶のくじ枝に結べば花のよう

岡山市 服部十九平

外股に歩いて何か主義を持ち

のぞかれているのを意識したポーズ

丸髷のカツラも来てる互礼会

媚態外交国際上の横恋慕

大阪府 山川阿茶

瑞川夫人逝く

うらやまし惜しまれて惜しまれて逝き

トップモードの服着て明治のよさを云い

本意なくも猫は避妊の手術され

ベトナムへサンタの足も重かろう

児島市 本田恵二朗

土まんじゅう可愛ゆく金魚の墓ができ

趣味欄へ働くことと書く無粋

派手と地味そんな夫婦で恙なし

自己評価わが人生は六十点

倉敷市 木村千容

八十一歳の春を迎えて

八十一これから生きる青写真

生きてたかそうかと恩給すこしべア

貫録がそいよりがたきものにする

冷厳につかずはなれず二十年

岡山県 直原七面山

金のある方へ神様も味方

両手でのれんを分ける律義さ

人焼く煙の色は紫

行くあてもなき雲と僕

今治市 越智一水

空席があるのに立っている女

切干を干せば粉雪呼びよせる

おはなはん集金人も見て帰えり

日曜大工ふと大陸の歌が出る

岡山県 田村藤波

またやったなとサイレンを寒くきく

盲人の立往生を見過せず

一日の給料パーマネット屋でとばし

ライバルに負けぬ門松でんと立て

下関市 桜川不水

池の鯉二人の影へ割って入り

見くびった予報を恨む日曜日

橙を豆腐へ絞り燗がつき

紙屑が追っかけ廻す十二月

加賀市 那谷光郎

月賦月賦月賦払って日銭借り

話題もう尽きたつなぎの灰ならし

株下落 小魚の骨にも痔を立て

どなられて舌出す受話機ガチャリ切り

竹原市 山内静水

嘘つけぬ男で渦中に巻き込まれ

三味線が音痴にしてはとほめてくれ

お茶運ぶ私を鏡に確かめる

友達はいい奴みんな出世せず

笠岡市 木山遠二

古稀迎えなると孫がふえて居り

闘志なく年賀はがきを買いそこね

年賀の文 型に嵌まってめでたけれ

カッチリにバスが出たので乗りおくれ

ホノルル 前山北海

グランパと呼ばれ気にせぬ孫の数

命名の日本語はグランパに頼み

停年と見えぬグランマ薄化粧

金婚祝いに世界一周の夢

奈良県 西辻竹青

理非は別後退出来る巾が出来

禁酒禁煙嗚呼人生も閑となり

夜中ふと醒めれば妻はお念仏

雪の夜帰れば妻は風呂をたき

出雲市 原 独仙

片屋根へ霜を残して陽は斜め

上ずった声只事でない予感

禿けてても散髪代は値引きせず

年末も年始も風の如く去り

平田市 久家代仕男

灯を消せば障子に影の吊し柿

釣れぬ日は帰れと磯の波頭

繰り越した赤字に佗し除夜を聞く

保身汲々動脈硬化症

豊中市 寺田花宵

数の子が高いと言うに好きになり

デパートへ見る日買う日と決めて行き

生温い世辞ばかり聞き日が暮れる

私ならこうするああるなど決め

倉吉市 奥谷弘朗

やれ買えそれ買えジングルベルがせきたてる

部課長をのしる酒になって幕

一笑にふした注意かくやまれる

捕虜四年パンの重さも目で計り

京都市 松川杜的

連休をまず読んでみる初暦

合格も併せて祈る初日の出

落葉焼く匂いも嵯峨は秋のもの

句碑読めぬままに落柿舎の門を出る

岡山県 横山一声

ボーナスの出た日の募金断れず

お歳暮をもらう理由をたしかめる

年末に締めれば倒産のうわさたち

年末の事故死の記事を寒う読む

香川県 三井酔夢

邪心みなふり切るミシン音高し
迷い犬抱いて寝てから対立し

アクセルの重さ子猫をはねた悔
放浪をしたいと書いた児で呼ばれ

大阪市 宮尾 あいき

百円で夢を買います宝くじ

十円のお客で休日の朝を起き

金策は出来ず夜道は雨になり

孫にやる年玉ためる貯金箱

大阪市 水谷 竹莊

おかわりを頼むに銚子振って見せ

赤電話うちでは言えぬ話し

踏まれそうになっても小犬じやれてくる

見えはってみても聴診器に勝てず

大阪市 西出 一栄

店頭のサンタ北風に武者ぶるい

あきらめていません涙涸れただけ

レクレーシヨンのつものりの手相氣にかかり

ちぐはぐに答える母に見る白髪

ハワイ 羽佐間 柳葉

新婚へ近所雑音入れたがり

旅の宿紋切型の世辞言われ

友情も片方が蓄めて薄くなり
自惚が醒めた時分は皺がふえ

岡山県 藤原 秋月

離婚してから倅せになりました

窓口の作り笑いがぎこちない

帽子屋が頭の形を褒めて呉れ

多数決味方ばかりを集めとり

大阪市 児島与呂 志

ある事故死から

いれずみが決め手に成って引き取られ

骨のいろやくざのいろはついとらず

仕事場で死んで葬儀料があり

埋めてても涙はこぼれて来なかった

諫早市 川岡 霊眼子

ミレーにも画けぬ日本の初日の出

いとおしむ生命静かに屠蘇の酒

赤坊のおしめ元旦らしく替え

日本の下駄も嬉しい初詣で

玉島市 井上 旭峯

子の馬になって晩酌きいてくる

母だけが祝うてくれた日を偲ぶ

喜びを分け合う膝が崩れがち

マスコミに遠く美談の主は住む

宇部市 平田実男

消防署慌てなさんなとも云えず

利息でも食える安堵が老け込ませ

訪問着値段も模様もすばらしい

モンペーをはけば野菊のような君

兵庫県 河原みのる

清濁を併せて吞めば胃が迷い

びわ湖にて

天智天皇人參ばかり供えられ

このあたりアベベも息の切れたとこ

浮見堂浅瀬にスカート捲り過ぎ

大阪市 福井野迷路

猿まねの技術輸入に五百億

大東亜どころか中華大地球

婚儀アラカルト

聞き合わせ家ありカーありババが居る

大安を信じ切ってた大惨事

兵庫県 遠山可住

農薬に負けずに虫も強うなり

金持ちに女房の味がわかるかい

思い切って半値を言えば手を打たれ

露地裏で東京の灯にかじりつく

加賀市 木村一路

浮気でもしろと見舞いに励され

ローカルは赤字赤字と押込める

転落の過去へ女の高笑い

マッチ擦る指の白さへ話しかけ

大阪府 宮地双楽

肩章で風切った夢追いつづけ

慈善鍋小さい善意の音も冴え

肩入れをするほど好きな方でなし

不調法と云うて貰うてその通り

鳥取市 藤本礎山

妻の佳き他人なんどの知らぬ事

訪問着腕の輪ゴムははめたまま

仏壇へ済まぬ供物の梨一つ

子が出来て自分の誕生日を忘れ

新居浜市 安藤桂仙

税務署に縁ない暮しもちと淋し

榾火ほど燃えて不倫の恋続き

生活力見きわめ恋のＵターン

そっとしてやれと茶の間で父助言

名古屋市 吉田水車

持てばもつ六十五才の鼓動鳴る
人間もハムもいよいようすつぺら
坂のバスのりとのような音を立て

門真市 福島鉄児

遮断機の向うを違反車が逃げる
追突をされ玉突のようになり
月賦まだすまぬ車で交通禍

島根県 藤井明朗

ひとときの逢瀬別れへ雨が降り
冬山へ魅力笑って子は出掛け
酒ぐせへ用心女心得る

大阪府 西いわを

写真では綺麗な池が人を呑む
尻尾立て猫に妥協をせがまれる
鏡餅今年も二つ重ねられ

伊丹市 小川静観堂

没の句はなるほどなあでまた楽し
健保本人よくも続いて診てもらい
尻に敷く型はやっぱり母譲り

大阪市 大坂形水

十二月ドシャンと一活怒鳴りたい
右折れのきかぬ通りへ出てしまい

数の子の売場決心つきかねる

岡山県 大森娛句楽
お扇子で良い気味に酔う落語なり

長男岡山城監督中出産

落成の城を見つめて産気づき
初孫の風呂に入れるを奪いあい

大阪府 石倉旅風

元旦譜

除夜の鐘雪がチラホラ降らんかな
東天紅平服のまま初詣

善良な顔ばかりなり初詣

奈良県 木村十悟

崩れるの予報に取り入れ汗みどろ
老いた母道具になって恙なし

艶話ばかりはずんで老人会

倉敷市 野田素身郎

金策へわざとオーバー着ずに出る
ボタンぐらいいは自分でつける共稼ぎ
春よこいこい子の霜焼が痛々し

大阪市 中島小石

還暦へあだ多かりし年憶う
鏡浄め浄め還暦の春粧う

河村瑞川氏夫人逝去

冬空へみんなのこして一人旅

岡山市 江 国 幽 谷

雨降れば降ったで祝う角かくし

衛星を何処で見ている孫悟空

転動で三十年を根無し草

西宮市 若 林 草 右

ありだけの種一坪に蒔いて待ち

七五三晴着が飴をつけて寝る

全日空遭難

宿帳がまだこめ客を待ちつづけ

大阪市 本 多 柳 志

ひらかたは明治の匂う菊日和

となりまでカラーテレビが来たあせり

十二月大きな声で子を叱り

高石市 谷 沢 好 祐

贈られも贈るも暮れに無い生活

出しゃばりが御貴名受けて筆を持ち

友、早逝

八合目迄来て無情の吹雪ふき

奈良市 宮 口 笛 生

これからの乗務へ夜の雨となり

蒸気機関車漫画のように走るなり
見習いの真剣停止位置合わず

宝塚市 小 畠 無 聖

仏縁で花屋と親しい口をきき

男性は読むべからずと書けば売れ

むき出しのままで行けよと紹介状

芦屋市 丸 川 初 甫

植木鉢の水は忘れぬ共稼ぎ

ストックで叩けば樹氷冬の音

良心をうつす鏡へ息をかけ

大阪市 今 西 章 雅

松葉杖はずせる日あり切らず済む

御詠歌を愛児死なせてから覚え

不潔だと背中を向けた妻のかん

倉敷市 水 粉 千 翁

父と母あの子の雲を追うて詫び

永く短かし銀婚の指を折り

四季を咲く花に埋れて無縁仏

小松市 馬 場 魚 山

婚約がすめばそれから金の事

霜の朝起して呉れる人の亡し

嫁来ると決まれば嫁に呉れと言う

岡山県 浜野奇童

堺市 高崎雄声

公僕として元日の靴をはき
百点をきちんとたたんでランドセル
あの辺に見えるはずです雨の旅

愛媛県 渡辺曉童

大阪市 礪弓彦

よせなべの巾たかさ紅一点を添え
防火演習忍術のように消してゆき
抜けば玉散るほど立腹してみたし

出雲市 中川晃男

尼崎市 岡本昭三

身を粉にしてかまぼこになる命
釣堀の魚に釣糸からかわれ
病氣など逃げて行くさと多忙なり

大阪市 森本良夫

岡山県 池田古心

迎新年

秘めごともなくパパとして二十年
元旦の誓い一年が短かすぎ

建国記念日設定

日本もやっと生れた日が決まり

大阪市 中川滋雀

大阪市 神谷凡九郎

今去んだ客の温みへ座らされ

ゆく年のファイナレを飾る風邪を引き

来年の顔で賀状を書く師走

高槻市 山田季賛

うれしさは我家の門も水を打ち
円満は一家揃って風邪をひき
水いらぬ造花は何かものたらず
ポーナスをもううて我身の非力知る
墨すってみたがペンにした年賀
除夜の鐘せわしく縫って救急車
留守宅の集金犬に追い出され
ヘルメット信じ單車をふっとばし
団体の客は素足で案内され
黒い霧田舎町にも垂れ下り
憶病な恋が六十になって悔い
ボロ家を継いで苦勞の修繕費
生きている事を他人の死に気付き
音階をはずしお美事な歌い振り
また焼けた死んだ新聞拡げて見
故郷帰り出来る用事を妻みつ

都心にも雑草伸びてゐる並木下

朝刊の小説毎朝ラッシユ楽しませ

笠岡市 木山要次

大胆なポーズを創る湯のけむり

無い袖を振る相談を寝てつづけ

躓いてまたつまずきし吾が不覚

新居浜市 小林孝正

愛すとはこんな些細なことに妬け

過去精算する氣の髪のを替へ

馬車馬であつた一生ふと化し

岸和田市 葛城伊三郎

ストーブで石油臭いお茶を飲む

一粒の豆おねおねと総入歯

茶瓶の蓋ぼっぽと動く温い室

大阪市 天正千梢

土愛し太陽拝む母八十路

技振の紅葉へ野点のかまをすえ

男は無用お裏さんで巾きかせ

泉大津市 高津徹也

手拍子もこれは年期をかけた音

伴奏へちよつととちつた初舞台

“一切はおまかせします” 一目惚れ

天草の五色の宝陸続き

アルバムの吾が人生にあくびする

恩給日たった一人の友と会い

八代市 永松道雄

またあしたやればよいと夕焼ける

内職の納期へ工場めく茶の間

上げ底と知って見栄で買う土産

富田林市 浅川八郎

退院のなき入院へ紫雲何所

病院の裏門余りにもまじか

気休めを聞き度ない眼を閉じる

善通寺市 岡田拳法

俺達が飲んでしなびた母の乳

男ならファイトファイトと海が鳴る

退院へ二度と来るなど送るなり

姫路市 隠岐不醉

元日は貸衣裳屋も五割増し

黒い霧発生したと予報官

大学出帯に短かし職がなし

大阪市 川口弘生

彦根に遊んで

江州はお城も商売上手なり

員数外よう来やはったと喜こばれ

女幹事食わすことには行届き

和歌山市 二越俊爾

温泉に豊そうな逃避行

閑散な山の湯選ぶ恋もあり

宝クジ買って一と月夢を見る

鳥取県 清水一保

肩書を外してわびし元議員

生活が掛って居ますとアイシヤード

折れそうにじっと耐えてる雪の竹

諫早市 大崎筆染

十二月魔術のように消える金

僕の嘘見破る父の眼の光り

次の児もつられて泣いてくる注射

呉市 林野甦光

友達にしてねと第二の母が来る

偏食の娘の無理へ負けてやり

熊本県 有働芳仙

戦後派も飲めば軍歌を歌い出し

勉強をしている振りもママのため

鳥取市 森本法泉水

小包の紐の切りよう子におしえ

倒産はしてもライオンズ・ロータリー

竹原市 杉原愛鳩

仔猫一びきバスを徐行させ

共通の雨トヒにしてケリがつき

西宮市 田中十方

正月を呼び込んでいるターミナル

まだ若い気がラッシュにはみ出され

布施市 森下愛論

針供養でつせとホコロビはつとかれ

灯に坐るホステス位置を心得る

大阪市 河井庸佑

秀才も落ちたテストのおとし穴

オール5をとったらなどとにげており

大阪府 佐藤甘草

ボーリング女房の手付見て笑い

この記録いつまで続くか句会歴

美禰市 安平次弘道

一割を近所がうらやむ拾い物

逆境を母の茶断ちにはげまされ

笠岡市 出原真奇

大崎島にて

島の妓にもてた夢みて風邪をひき
出稼ぎに老父も出て行く十二月

愛されて猫悠々と歩をはこび
会うてきて雪の夜のあたたかさ
熊本市 楠田英子

お浄土はあついと見えて皆はだか
遇密土の西方さけて東尋坊
京都府 清水谷 句楽坊

初孫誕生
松江市 岡崎 祥月

初孫の顔俺に似る俺に似る
張り替た障子に目立つ古畳

江南市 伊丹阿喜良

單身赴任
窓たたく風あり妻子ふと想う
母の死を想い出させる雪景色

鳥取県 渡辺 乱坊

上役に説教をしてにらまれる
粗品付魅力の列に妻がおり

新居浜市 近藤 凡生

はつれ毛も見せず女の性に泣き
正直に生きよう宝の子がふとる

富田林市 岩田 みよ

あっけなく師走の町でまかれて来
三面鏡五つさば読む顔が出来

御無沙汰を叱るように来る句会報
愛強し不適合血液結ばれる
松江市 柳 楽鶴丸

お作法も無手勝流で煎茶飲み
釜飯に赤だし添えた如才なさ
守口市 羽原 静歩

六十の出稼ぎもいる夜の部屋
子を貰うのもあきらめたままに老い
愛媛県 村上 旭童

あの二人夫婦の様に口をきき
ええ家庭騙され上手な妻が居て
大阪市 室谷 鉄舟

セロテープの便利さ亡父は知らなんだ
元日も出勤のパパ子等不満
加賀市 細呂 木魯木

存命してお蔭と思う神詣で
碁仇が借りを返して飲んでゆく
福岡県 太田 湖平

容態を気のせいにしとく見舞客
お正月に買ったものが三つ出来
大阪市 西川 誓二

質流れ單車違反のくせが出る
和歌山市 西尾 公作

病む妻の窓目貼りして春語る

和歌山市 土谷城石

嫁ぐ娘の挨拶笑顔でうけて泣き

外孫のませた御世辞に舌をまき

和歌山市 野村太茂津

今年こそで明けやれやれで暮れてゆき

師走です忙しそうに見せて置き

泉佐野市 大工睦夫

披露宴抜きの略式惹なく

新幹線一度乗ろうよ歩こう会

★

西尾 栞

社長今日孤独の二字を嘆みしめる

キーホルダーと名が変わっても親爺持ち

新聞に埋もれている風邪の床

日本に箸紙があり祝膳

悟れる如く諦らめる如く老夫婦

若本多久志

無ければ無いなりで越す十二月

灸すえて居た亡母想う灸をすえ

倅はよい部下をもつ廻り椅子

女にはもてぬ話をわざとする

菊沢小松園

「まだお若い」と言わせたい話題にし

生活にかかわりのない唄が好き
考えたこたえ動かぬ声になり

紛ぎらして打消すつもり涙落つき
生きて行く限りの愚痴がまだつづき
十二月高い利息を言っとれず

松江梅里

天職に生き甲斐を持ち欲を捨て
貧者の一灯ぎりぎりに来る歳暮
会者定離されど絆は断ちがたく
無難主義出世コースを除外され

清水白柳

国会解散賀状がふえただけのこと
総選挙知ってる名前だけを読み
いいことを言うと言見直す奴もあり
追越禁止じれたい程のろい奴
制限を守って居れば追い抜かれ

川村好郎

水底に動かず冬の鯉堪ゆる

ころざしいつか小さく日記終る

旅にある心にさせる霧笛鳴る

貸付を出て師走の風まとも

飼鳥の飛躍あくまで籠の中

北川春果

景気回復の正月を寝て過し
年寄りも数の子などともういわず
フィルター付き煙草をパイプつけて喫い
建国記念日決る

二月十一日昔の雪が降るだろか
紀元節の歌スラスラと思出し

痴盲録

(5)

高 鷲 亜 鈍

三十九年七月尾道の医師の診断によると、手術をしても駄目。両眼とも完全に死眼を宣告されてしまった。

早いものだ。ここ尾道に移り住んで四年目。若い頃からなんでも書いておくという癖

が、ストップとなったことは口惜しい。五十年、先輩、知己、友達に囲まれて楽しく、時にはつれない生活を送った一生涯を投げ捨て、流離の巷にひとり住む決意になったのも、なんのわずらいもなしに、ちっとは良いものを書き残したいと、思っただけこそだ。今は残り少い人生とはいえ、眼を先に死なしてくれ余った命を何に使えというのだから。

同病で一足先に逝った武部香林氏をしきりに偲ぶ時がある。ああつかしい活字。活字への愛着。書くことの人一倍強い私の執念。

わかってもらえらるだろうか。

★

死ぬ時は ああ光をと云うたるか
中盲のいまだ男臭いのにとつと
花活けてから水盤に水をさし
乾いてるころに春の雨しめる
浅ましいかぎり 昼も眠る けだもの
声出さず手振り僕を除外する
女房の母にうとまれ膳につく
頼まねばうるさがられず すむものを
喜びも悲しみも 小さい液
どん底でルカ爺さんは ひなたぼこ
おかげがあるのかいな 伏し拝み
指さきで立石の表情をよむ
お遍路に出たし連れそう ひとがほし
召されずに くらい世界を生きつけ
忘れたり忘れられたり生きている
テレビがとまり やみくもに句をつくり
かまわずに何かごそごそする二階
盲人の夫婦 それゆえ愛しあい
盲父ではどうかと二の足ふ縁談
再製のきかないロスとなりにけり
詩のゆえに町のあんまになりきれず
活字から放れた頭に舞うことは
指でかく文字は空をきってゆく
六十の手習い 点字を教えてよ
手さぐりの身にも明治百年やってくる

・ 近 詠 ・

一月雑感

元旦雨生駒盆地の色瓦
寝正月する気はないが外は雨
元日雨四畳半なら酔えもせう
返り討ちにあつて碁会所から戻り
二千円の罰金かけた日記書く
お元日子にわがとしを勘定させ
にらみ鯛片身は猫へおすそわけ
人生は永し折れたり曲ったり

・ 麻 生 菫 乃 ・

川傍柳 初篇研究

(四十四)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味^故

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

ぬるはくや本田へちよいとさして立

一甫

前田「縫箔屋」は、縫箔を職業とする人「本田」は本田髷。句意は、本田髷へ縫箔用の針をちよいとさして立ったというだけで、当時の流行のものを出したのである。

岡崎「賛。職人のしぐさ。」

清「賛。「手一本なくしてかりる縫箔屋」

(二・六)「縫箔屋五色に壁へ吹きつける」

(二・33)「縫箔屋気のむく方へ針が出る」

(一八・17)「縫箔屋のびをしてから飯を喰い」(二・19)

藤井「ちよいと立ちだから、ちよっとした用をすますと、また仕事に精を出す所だろう。本田髷でも意気な働き者の店者を想像させる。

高須「縫箔屋という小キレイな職人のさまを詠んだキレイな写生句。佳句。」

丸・岡田「賛。

43 傘斗返しなさいと女房いひ

長笑

前田「この女房ちやっかり者で亭主の動行をよく知っている。だから「傘だけ返して物を買ったり、お札をやったりしてはいけません」というのである。もちろん返し先は女房を感じてのこと。

清「「ばかり」という語は「……だけ」

か或は「……ぐらい」の意もあるか。「ぐらい」という意味があれば「傘ぐらいさつ

さ」と返えしておきなさい。ずるいとか、だしがないとか云われるから」ともなる。

しかしここでは前田説が正しいか？

藤井「謝礼の問題ではなく、この亭主とかく浮気者で外出すると帰りがおそくなる

ので、常に女房の御機嫌を損じている。今日も今日とて「ちよっと傘を返えしてく

け」と、小意気ななりで財布をもって出かけようとしたので「あなた傘だけです。」

すぐお帰りのさいネ」と一本釘をさされたところか。小生などもよく女房から同様な言葉を頂戴する事があるからよく了解できている。阿々、川柳の貸傘はボロ傘にきまつて従って「ばかり」は「だけ」だと思ふ。

川端「礎稿に賛。こんなボロ傘だからという意もあるだろう。」

高須「「ともかく返しておきなさい」困るときはお互い様、向うでも降るとすぐ困るのだから……でよいのではないか。これは女房として当然の心使いである。

丸「突っ込んで解そうとするとかからぬ句だが、高須説と同様軽く解している。

岡田「礎稿に賛。礼の品など不要と女房がいうのだが、この句ドライな女房とも解されるし、あるいは貸してくれた傘があまりにひどいので、それに対する立腹と解されぬことはない。」

前田 〓「角兵衛獅子」は越後獅子ともい
毎年越後から出て、木賃宿に泊り込み草
履ばきであったのが普通であった。獅子頭
をかぶり笛に合せて舞った。句意は獅子
は子供、親方の笛吹きは伯父らしいといっ
た様子。

高須 〓猿廻しと違って、人間（少年）を
使つての商売。獅子舞いの方にはいろい
ろ芸もあるが、笛には芸もあるまい。子供
を食ひものにしてゐるな、の意も多分にあ
るのではないか。

丸 〓賛。「角兵衛獅子笛ばかり人らし
い」（一・20）には高須説の「子供を食ひ
ものにしてゐる」といった感があるが、本
句「伯父らしい」というところ、むしろ両
者の呼吸の合った親密感がある。

岡田 〓この句には少年を食ひものにして
いるという苛酷な感じがなく、むしろ温か
い気持ちで「伯父らしい」と軽く作者は詠
んでゐると思う。

外聞のわるさ乳付けが式人来る 一甫
前田 〓乳付けはちちつけの略。生児に初め
て乳をのますこと、またその人をいう。句
意は、二人は年子か、ふた子か、どちらに
もとれるが「二人来る」と明白であるか
ら、ふた子であらう。

岡崎 〓二人も乳付けが来るなら、三つ子
だらう。

清 〓双子だと思ふ。

藤井 〓「双子なら一人でよさそうなのに
二人もくるんだから三つ子だね」と、とか
く世間はうるさい。二人も乳付けがきた
で外聞がわるいので実際は二人でも三人で
もかまわないだらう。産婦が衰弱してい
る場合でなければ数学的には、岡崎説の三つ
子が正しい。とまれ二人まで乳付けがくる
ので近所の問題となった。双子にして三子
にして、句は二人来るとしなければ効果半
減してしまう。

川端 〓双子説賛。

高須 〓藤井説をとる。生まれた子の数は
問題ではない。「乳付けが二人来た」とい
うのが問題で「外聞がわるい」といって
るので、そんなことにまで人前をはばか
た江戸の町家の有様を詠んだ句。

丸 〓やはり裏には生まれた子の数が問題
になるのではないか。岡崎説に賛。

岡田 〓双生児では何となく恥ずかしい。
この句を双子か三つ子かの良家では「お乳
母日傘」といって、一人でも乳母を雇うの
が普通だったからである。小生は礎稿に賛。

456 きらずを付て伽羅の下駄みかいてる

梅斧

前田 〓きらずは豆腐のカス、おから。伽
羅は上等、最高級の形容詞。伽羅の下駄
は、吉原通いに伊達綱宗がいたと称する
もので、伊達騒動記に綱宗は豆腐屋へ立ち

寄つて、伽羅の下駄を与えたところ。この
下駄をきらずをつけて磨いている。「屋形
へも参れ此の下駄とらするぞ」（三九・17）
「すでのこと伽羅で豆腐を焚く所」（三五
・32）「下駄を見にいらぬ豆腐を買ひに行」
（四・13）

岡崎 〓賛。「から汁を食ひ／下駄の話
なり」（傍一・10）で説明した伽羅の下駄
を豆腐屋だけに商売がら、キラスでみが
いだらうとの想像。なお「伽羅」は熱帯地
に産する香木で、インドでは釈迦の像はこ
の香木に刻んだといわれる。高貴な香木。

清 〓この伽羅の下駄と豆腐屋を詠んだ句
は多数ある。それだけ有名だった。「こゝ
へも半丁下駄をちつと見せな」（傍一・47）
「下駄を見せねへときらずを買ひに来る」
（一〇・28）

丸・岡田 〓賛。

麻生路郎著

新川柳鑑賞

定価 二五〇円
送料 一二〇円

橘高薫風著

れもん

送料共
五〇〇円

川柳漫画化の野望

小畑 自由朗

思えば三十数年前、私がまだ大阪ガスで、ロクをチヨロமாகして居た頃、「大阪漫画家集団」と名乗る、一枚の絵も売れぬまま哀れな連中の集りがありました。

其頃「谷脇素文」と云う有名な漫画家の川柳漫画が大変な人気でした。そこで、この哀れな連中も、素文の向うを張って、より以上に、現代的な新感覚で、川柳を漫画化して見ようと云う野望を抱いて、さっそく取りかかってみたのですが、勿論、素文大先生の才にも業にも遠く及ぶべくもなく全々物になりません。そこで、私が彼等の才と業に似合うような句を作ることになりました。

そして画き貯めたものや、他のものもろの迷画を並べて、ガスピルで「即売展」を開きました。

そして、何んと売れたのは川柳漫画の軸ばかりでした。中でも

血庄の話重役室の午後三時

と云う句のものが、追加追加で十数本も売れました。

そんなことから川柳に興味を持ち始めまして、いきなり、それでもおそろおそろ「川柳」の句会に初めて出席して、路郎先生に抜いていたいたのが小作米はらんで地主の壁の映えの句でした。

それから、それに勢いを得て「川柳」に毎月投句を始めました。

そして其後の永い永い歳月を先生にどれ程に——それにも拘わらず——路郎先生、申訳がございません。

焼餅

大西 八歩



家業が左前になったのと、勉強が余り好きでないので、商業学校を四年修了の春、郷里の鳥取市を飛び出して上阪した。私が十八才の昭和初年頃でした。入店したのは船場の久

宝寺町の帽子問屋。名前も英吉どんと呼ばれて、初めの一年間は年下の同輩達にはいじめられるし、言葉は鳥取弁のつかんせ、ごつついを笑われるしで、夜半枕を涙で漏らした事も何回あった事か。一そう店を止めて国に帰ろうかとも思ったが、店の主人と気が合ったのと、御寮さんが良い人なので、辛抱しいし二年目を迎えた。

正月早々名前も英七となりさん付けで呼ばれるようになったので、気分的にも、待遇も非常に楽になった。兵隊の位でいえば尉官待遇である。外出にも羽織を許されて、給料も上る訳であるから、月二回の休日には、心斎橋から道頓堀、千日前から新世界、さては北の天満の天神さんまで、大阪の歓楽地を遊び歩いた。何せ出雲屋の鰻丼が二十五銭で、鰻のさしみが十五銭位であるから一円も持って出れば、映画を見物して、好きなものを食べて帰り、店の近くの夜店でおでんか寿司位が未だ食べられた。

店員達が就床する十時頃、屋台車を引いて、うどん屋や焼餅売りが廻って来る。「焼餅、焼餅、米は讃岐の一等米、これを製した評判餅、評判餅の焼立て焼もち」と語尾を長く引いて寒夜の船場に廻って来れば、一番年下の店員を買いに走らせて、焼き立てのあん餅を、フーフー吹きながら食べたものです。

食べ盛りの私は近所の井筒と云ううどん屋の主人と賭けをし、うどんを十五杯の時は十三杯半で負け倍額を支払いましたが、ゆで卵を五分間に塩無しで食べる賭けでは、十五秒余して十六個食べ、見事仇討ちをしました。

正月のあも、(餅のこと)では店の店員や主人まで手伝って焼いてくれた白餅を、二十五個とうどんを三杯一度に平げ皆の目を丸くさせた。しかしその後で、銭湯に行き、裸になって湯舟まで行ったが、腹の中の餅が出そうになったので、あお向いたまま股のあたりを濡らしただけで引返し、その夜は一晚中餅におさえつけられた夢にうなされて閉口した。

その年の春から地方の出張を始め、手はじめに先ず郷里の山陰地方から手をつけた。福知山、豊岡、鳥取、倉吉、米子、松江の順で今市(今の出雲市)まで足を延ばした。

帽子の見本の入った大きな行李を七、八个持って、行く先々の旅館に泊り、酒食を供して商売した。

鳥取に帰った時、川端通りの伯父、中島鉄州さんを尋ねた。川柳川端柳吟社の主幹である鉄州さんにすめられて川柳を作って見る気になった。十九才の春である。

堂ビルの肩書で

三角の家に住む奴得意がり

と云う句を、三角の家に住んで得意がりと

訂正していただき、他の句と一緒に「川雑」に投句し、この句と他の一句が初めて雑誌にのった。それが病みつきになって、駄句を作りにまくり「川雑」「番傘」「ふあうすと」等、数種の雑誌に投句した。発表誌が待ち切れず心斎橋や、道頓堀の書店に何度足を運ばしたのか知れない。

胸をドキドキさせながら本を開く時の氣持。それは四十年経た今日でもまざまざと思い出されてなつかしい。

その頃玉造の清水白柳子さんの句会に出席さしていただき菊沢小松園さんともよくお目に掛かった。良き時代の良き思い出です。

手許に今は亡き中島鉄州さんの
転び寝の素足に触れしものは秋
鉄州
の短冊がある。

二郎と号した頃

吉田水車

おたずねにあずかりました処女作は、厳密

に言って川柳の作り初めはサンデー毎日柳壇ですが、本格的には路郎先生に師事して川柳雑誌の昭和六年四号「近作柳壇」に入選した犬ころも歩道へついてホットする

を以て処女作とすべきでしょう。しかし當時は号を二郎としていました。が句会などで名のりを上げる際、ジロウ、では路郎先生とまぎらわしいので水車と改めた次第です。そして同年十一月社友にすいせんされました。

大阪も昭和六年頃すでに堺筋あたりの都心や郊外電車のターミナル附近では交通漸くはげしさを見せていて、歩道車道のある所では人間でも歩道に上ってやっとの思いをしたものです。犬にしても歩道へ来て安心した様子で後ろをふりかえっている姿をとらえたのが右の句です。

さて当時の思い出としてはバーはまだカフエーと言ひ、

トルコ風呂まだ日給の身なりけり 雅幽
を見るとすでにトルコ風呂が出来ていたが、やはり相当な料金を取ったものらしい。何と言っても費用四拾万円で大坂城がコンクリートの城に生れ変わり、古城復元第一号として大いに浪花っ子の意気を見せたものです。

一方世は失業者ルンペンが続出して労働運動もはげしさを増し右と左の対立、やがて国防婦人会として発展する愛国婦人会の活動が

さかんになったりして何か知ら無氣味な年でもありました。

最も愉快なこととして、同年八月三日附大阪朝日新聞の「天声人語」欄の全部を川柳雑誌の発表句で埋めつくされたことです（担当者「釈」瓢斎氏は毒舌を以て知られた論客で又俳人として俳誌「趣味」を主宰された）

掲載の句はすべて十八句で左に記して参考に供します。

資本家の祝してタンク聳えたち
社長と闘士へ煙突そびえたち
検束を遠巻きにして鳴く蛙
写真班もめて来るのを待つてゐる
唯命是從うて首が無事

包丁をもつ手へ鶏商はれ

貨車の牛神戸をさして急ぐなり

貯金とは反比例して子が産れ

歯のぬけたまゝで女房の二三年

あゝ云へばかういふ女房子沢山

女房があるばかりに馬鹿な顔

夜逃げとは知らず子供の寝むたがり

バスガール危い子供のけてゆき

エプロンをかけて奥様何もせず

夕涼みカンカン虫が聞いてゐる

断髪に細いズボンを見下され

角帽にまだ憧憬れのもてる歳

芋虫にきけば主義なぞ要らぬげな

註、新聞の立場からか句主は載せられず、二、三の作者は判りますが他はちよつと思ひ出せませんので発表通りにしましたご了承を乞う。

鮎美選で

天位



正本水客

潮田明坊さん、国鉄の先輩でもあり、月長石の名で長く俳句をやっていた人で、古川柳の研究をしたり、快速度の名で個人誌を出したりしておられたが、病を得て国鉄をやめられてからもズツとお付合していた。

その明坊さんに勧められて、大鉄局の句会に顔を出したのは昭和八年の夏だったと思ふ。勿論、それまでも、紫香君、潮花君、それに若くして逝った田中風葉君等と、それらしきものを盛んにひねくって同人誌を出したりしてはいたが……。当日、二階の課題で選者は阪神電鉄を牛耳っていられた水谷鮎美

さん、

新婚を訪えば二階に通される

いきなり天位に抜けた。水客をして川柳に決定つけた記念の句である。

今も時々、本社句会へも顔を見せる岡田某人君や、大陸から引揚げて間もなく亡くなった植山九天君等が、当時そうそうたる若手として盛んに活躍していた。

本社の大会で、某人君が所用で早退したあと、発表になってみると、ズバリズバリと三題が天位に抜けて最高点を獲得したのが印象に深い。今は吉永で親分然とおさまっている浜田久米雄君が代りに賞品を受けに出たように思う。

九天君は広島鉄道局が開設された時に大阪から別れて行って、昭和十三年に大陸へ渡った、同君の句風は直線的で私とは対象的だった。春を佇ましたりするので水客さんの句は分らん等と冗談を言いあったりした。私が

佇んだ春母ひとりなる女事務

などという句を作った反論である。その君も既に亡い。

当時、大鉄句会には福田山雨楼さんに指導を仰いでいた。先生は鉄道の大先輩でもあり、東京へ転任されたからは、川維の支局長として、むつかしい路郎先生の片腕の責を果された。プラットフォームの課題で

ブラットの遭難場所へ陽があたり

が秀句に選ばれたとき、下五の陽が当りを、始め「砂を撒き」にしていたと話をすると、謹厳な先生はアアそれはいけませんと露骨にイヤな顔をされたのを、今でもハッキリ覚えてる。

全快の走って見せて叱られる

も当時の作品である。

なかなか、その頃も、いい句を作っていたんだなと自分で悦にしていると、何処からか蔭の音が聞こえてきた「裏返して言えば、三十年間チツとも進歩してはいないということじゃネ……」

少年の頃



麻生 アート

ハピーエンド真白き紙に何をかこ

師走二十二日の夜更け。年賀郵便締切を前に住所録らしき物（一ツに纏っていませんので）をひっくり返している最中、川柳塔社からのアンケートを思い出しました。作句年

代などお尋ねの事ですが、

その時はアリバイ立たぬ程忘れ

で、多分十四、五才頃でないかと思っています。ハピーエンドは映画や何かのいわゆるメダタシ、メダタシではなく、当時の私としては幸福の絶頂と云うようなニュアンスを含めたつもりでした。

「川雑」の句評で西田岬楽先生なんかに御曹司なかなかやるなあ……の感が深いとか何んとかおだてられていた事を思い出します。

松阪俱樂部

のころ

川村好郎

昭和十六、七年頃、夕刊「大阪新聞」に柳壇が設けられ、路郎先生、水府先生が一週間交互に選者になられ、その入選句が毎日紙上に発表された。

其時にふと興味を覚え作句してみようと思ったのが私の川柳に手を染めた最初であつた。

一週間ごとに課題が出て五句以内を投句す

るのである。いつも少くとも三句は抜けるであらう。いや全部入選するであらうと、自信満々で投句したものである。そしてその度ごとに全没である。指導者もなく、ただ思うままに五七五にならべるだけであつて全没になるのが当然であるが、そんな事はわからず、むしろ不満であつた。そして昭和十七年十一月五日発表の水府先生選「米」にはじめて一句入選した。その時の私の投句した句は今でも句帖に残している。

たき初穂遺児霊前にます供え

配給日朝から米櫃出しておき

腕白児配給量など何のその

特配の米で餅して秋祭

こんな幼稚なはずかしい句を出して得々としていたのである。この時、最後の句

特配の米で餅した秋祭

が入選した。たった一句が不平ながら嬉しかった。私の処女作といえはこの句である。つたない句であるが初入選であり、当時の社会事情もよくわかるので私は大切にこの処女作を書き留めているのである。

こうして、松阪俱樂部の川柳講座に入会し、路郎先生に親しく川柳の指導を受けた。

路郎先生に永く教えられたご縁はこの時に始つたのである。この御指導と、偶然にも私と同期に松江梅里が「大阪新聞」の柳壇に私

回顧

同様な白半分に投句していたことが縁になり
良き指導とライバルによって漸く川柳らしい
ものを作り得るようになったのである。
もし松阪倶楽部の川柳講座での路郎先生の
あの懇切な手に取っての指導がなかったら、
といつも私は思い出すのである。

若本 多久志

私の処女作……といっても殆んど記憶がな
いというのがほんとうで、昨年白柳さんが古
い柳誌を整理していたら、大正十四年二月号
の「百万石」に、私の句が出ていたと見せて
頂いたが、どうしても覚えがない。恐らく俳
句を盛んに作っていた時代、川柳らしきもの
を選んで投句したものだと思う。

強いてそれらしい句を想い出せば
満足にそれ者あがりとうなづかせ

であろう。確か昭和十四年頃、川柳雑誌がB
版4型時代、大阪では松坂倶楽部で路郎先生

の川柳講座が開かれて、地方柳人を羨やまし
がらせていた頃、私に川柳の作句法を教えて
下さった、安川久留美さんが初歩の句として
激賞してくれた句であった。

今その頃の川柳雑誌（愛読者になって初め
て手にした）百八十二号を開いてみると、巻
頭の頁に、軍医中佐小川静観堂氏が蒙強で、
恩賜の繻帯伝達式をやっておられる写真や、
市場没食子さんの陣中吟のかこみ、それに川
雑誌記者の留守宅訪問記中にはご長男、久介君
（四才）の可愛らしい写真も飾られている。

没食子さん最近の作品にお孫さんを詠んだ
句が多いが、おそらくこの坊ちゃんのお子さ
んがモデルなのだろう。

その川柳塔欄を見ると、今も尚、川柳塔誌
や、句会に活躍しておられる、紫香、潮花、
形水、いわを、久米雄氏等のお名前が懐しく
見える。その半面、山雨楼、柳路、柳秀氏等
すでに鬼籍に入った方々の作品が文学の不朽
を示しておられる。

近作柳樽欄には、春果、万的、文月、不
水、古方（弧蓬）静観堂、喜由、栞、文庫氏
等、現役細のお名前が見られる。この頃の近
作は路郎選の厳しい篩（ふるい）を通った句
でなかなかの佳作揃いであることも嬉しい。

「一路集」の選者には川柳文学主宰堀口堯
人氏がなっておられなつかしいことである。

処女作

記事の中には路郎先生の「北支蒙強の印象」
が心を打つ、それにしても当時の先生は何と
お元気なことだったのだろう。その先生も今
は亡き人となり、その遺志をつぐ我々がこう
して、川柳塔誌を心のささえとし、この道に
精進していることは誠にしあわせであると思
う。

西尾 栞

頭ほど光らぬ父でありにけり

昭和六年七月二十五日の天神祭の夜、初め
て阪大川柳会が誕生して、その時の兼題「父」
に応募した時の句で、これがそもそも川柳な
るものに、手を染めた句であります。爾来三
十有余年、頭は段々父に似て来たが、句歴は
ど光らぬ句を作って、柳界に低迷しておりま
す。

秀句鑑賞

：前月号から：

寿のその達筆も春らしく

(水車)

年賀状に、一字かいた寿らしく思われる。「寿」という字は、一筆描きに巧みにかけば、ミノ亀の尾のように見えるものである。ミノガメは歳古りた海亀。楷書でかいても、如何にも芽出たいという感じが、表現されておれば、祝意はおのずから相手につたわる。書く人のところが豊かでなければ、かたがとれないもの。達筆は、そうした意味のものであろう。

「春らしく」が、この句を引立てている。

シャボン玉売り半日の肩が凝り

(きさ子)

シャボン玉を入れた函を胸先きへ吊って、街角や橋のたもとに立っている、シャボン玉売りは、如何にも、春を吹いて廻っているようなものだ。久々に佳句に会った気がする。

後藤梅志

「半日の」と区切ったところも、子供相手の、しがないこの商売人の気苦労が思われ、そぞろに、春浅い日の感傷を思わせる。シャボン玉が、橋の上からパラパラ、いくつも川面に落ちて行く美しさに、しばし佇んだ、淀屋橋上の雑踏が思い出される。

秋の雨小粒ながらもうつむかせ

(喜由)

春雨には、顔をほころばせ。秋の雨には下をむくか。とそうしたうけ取り方をしては見当違い。それはそれとして、この句は「小粒ながらも」が頗る利いているのである。

しぐれの雨あしは速い。それが晩秋の物を思わせ、ともすれば、人を脚速やにする。それを小粒の雨が誘い込むのである。この辺が川柳の呼吸であろうか。「うつむかせ」と気脈がびったり合っている感じがうけとれる。なんととても捨て難いのは老巧感である。

無駄なことひとつようせんのも哀れ

(花宵)

広い世の中に、愛人も持たず、何一つ道楽があるのでもなく、真面目いっぽうで長い人生をゆく人があるが、こんな人は案外つぶしがきかないものである。何か失敗すると、再起すら覚束ない人がある。こんなあんがい機微にふれたことを知ってか、知らずか、作者は、何も彼も見通したように平気で云っている。

どう見ても、作者は男勝りである。女性の川柳も、その位の鑑識はほしい。この句も、そんな人は話せない。と言っているようだ。

夜のひとりせめて明るく灯を点し

(牧人)

作者の闘病生活は、もう十年以上もつづくであろう。私が知ってからも、十年に近い。私が手術をした頃は、よくあの須磨の浜辺を思ひ浮べたが、この句を見るにつけ、人間というものの強じんさをひしひし感じる。人生はつねに闘いである。気が折れると敗者たるを免れない。只管恢復を祈ろう。この句は「せめて」の一とことに万ここの思いが籠って、人を打つのである。まだまだ彼は、作家として健在なのである。

ちぐはぐな心煉瓦の肌ざわり

(いわを)

「ちぐはぐ」とは、くい違うことである

が、ここでは、作者の求める世界と、それに釣り合わぬ外界の遠だしさ。周囲の情緒の少なさが、その内容となつて居よう。

それを煉瓦の肌ざわりと、表現した、作者のキメのこまかさが、この句のキメを更に、こまかくしている感がある。煉瓦は、水分も吸収するし、弾力もあって、どことなく人を引きつける作用をもっているが、地肌は、労働した人のかかとのような感触である。

明治百年蹄の音は消え去りぬ

(薰風)

この句は、戦争軍人を象徴する、軍馬の蹄を云つたものかと思つたが、薰風さんは戦争をいかに否定する、そんな浅い人とも思われず戸惑つた。わたしの耳底に残るのは、二頭立て、又は四頭立てで肅々とはしる明治天皇の召されたお馬車である。カツカツと音を立てて、周囲万民を肅然とさせた、あの名馬白雪のヒズメの音こそは、何物にも勝る統治力をもつていたと、今でも思つてゐる。それは、明治文化の、総てのシンボルとなつた。忘れてはならぬ。まだ明治は亡んでは居ない。これは清瀬一郎氏も云つてゐるのだ。

空堀に挿すとあわれな菊の花

(齊花)

菊の花は日本の国華である。もっとも昔の黄一色とはちがつて、白あり、バラ色あり、アカありで、近頃は、バラと余り違わなくなつたが、それでも花の気品はキクに限る。空

堀か牛乳堀に挿していいのは、コスモスカカーネーションぐらゐのものだろう。

この句のよさは、空堀に挿したキクの花を「あわれ」と感じた作者のこころにある。なんでもない句のように見えて、光っているのはそのせいだろう。

怒りとは淋しきものよ友を打つ

(酔夢)

作者はいま悩んでいる。大きな事件があつたあとは、悔恨があとを引くものだが、友にうら切られた口惜しさはなかなか消えるものではない。だが、淋しいと感じるのは、自分のはしたない仕打ち。とり乱した姿が我れから悲しくなつたものであろう。

しかしながら、土壇場で、本当に腹を立てることが出来ない人を、私はけいべつする。煩ベタの一つでもパチンとやれば、相手もやがて反省するもの。女にも、強さは要る。

セールスは遠縁まででゆきつまり

(清人)

セールスに、いま大海戦術というものがあつて、経営者は、新しい人を、次から次へと採用して行くのである。甚だ狡猾なやりかたで、親戚知人を、それからそれへと喰いつぶすのを待っている。ホケンの女外交員などもそれである。親戚はたまつたものではない。

この句は「遠縁」がよく利いている。セールスは、この壁を突破しなければならぬ。

川上三太郎

紫綬褒章受賞並喜寿

祝賀会

小社はこの重なる喜びを記念し、左記の通り自祝の意味をこめて、祝賀会を開催いたすことになりました。

皆様のご賛同をお願い申しあげます。

日時 昭和四十二年三月十九日(日)

午後一時より

場所 湯島会館

文京区湯島一丁目七七一五

電話(八一三)六二二一番

国電御茶の水、都電湯島二丁目下車

会費 一、〇〇〇円(会食費共)

宿題(各3句)

〆切 昭和四十二年三月五日

「紫」 村田周魚氏選

「川柳」 川上三太郎選

〆切日を厳守します。出席者でも当日は受け付けません。準備の都合がございますので、ご送句の際出席の有無を必ずお書き添え下さい。

祝吟(一句)

祝辞 来賓各位

川柳研究社

東京都台東区下谷二丁目二〇一九
電話(八七二)四八四六番

答弁は露は尾花と寝め程度

(静観堂)

この句は俗謡の「尾花は露と寝たという。ツユは尾花と寝たという。ええ寝ぬという。寝たという……」の当て込みで、この頃の疑獄事件や、選挙違反などの、議會答弁を皮肉っているのである。まことに、犯罪の筋は微妙である。

おしまいの「ええションガイナ」まで分かる人には、可笑しみを万喫出来る、仲々シャれた作品に思える。作者は粹人である。

初霜の田へ先発の鶴が着き

(弘道)

鹿兒島線の阿久根や、山口県下を、汽車で過ぎると、田の畔道に鍋ヅルが立っているのが見える。このツルは、遥かにシベリヤの空から、あたたかい日本の国へ、泥鰌をたべに来るのである。その季節は、百姓仕事の終わった頃だが、百姓は田を荒すといって、よく問

題になる。この頃は町村が補助を出して、保護するようになったが、日本人は吉兆として鶴の渡来をよろこぶ。鍋ヅルもまた、目出度い鳥だ。

この句は「初霜の田」が、スッキリしている。土地感。季節感。とも、手堅い作句ぶり。なんとでもめかせとダンブつ走り

(拳法)

愛知県下の園児殺事件いらい、ダンブカ1乗りを、目の敵にしているが、運転手には気の毒である。今迄放任しておいて、俄かに、事故がおきると、騒ぎ出すのは民衆のくせであり、また取締り官憲の怠慢である。

この句の「なんとでもめかせ」は極めて直裁的に、運転手の不満をあらわし、小気味よき作句である。作者も、同情者と見える。

死神は前から切符買って置き

(俊爾)

面白い句だ。死神や貧乏神は、障子のすき

間からも這って来て、姿を見せない。この間の松山の事故なども、死神の仕業かも知れないのである。

死神は、前から切符を買っていて、ちゃんと先に乗り込んでいくところまで、想像を働かせた手際は、非凡という外はない。

「買って置き」でとめたのがよかった。根が腐っているに素人水をやり

(春果)

しはしば経験することである。素人の悲しさは、葉がついておれば、咲いてくれると思いついておけば、おかしなことだと思つて引く。抜いて見れば、すっぱり根はぬけてしまう。笑えない腹立たしさだが、日当りや、風通しが悪い場所へ永くはつとくと、そんなことになる。人間のからだも、と同じことだ。

この句は、根が腐っているのにと、無駄な字を入れたかった細心を高く評価する。句も、また捨てがたい。

柳樽と義経

吉田水車

義経ブームにおもうのは、柳樽でもずいぶんと源平戦を詠んだものはあるが例の勸進帳で有名な安宅関を詠んだものはないかと柳樽を通覧(と言っても岩波版でせいぜい三十一篇あたりまで)したが見当らぬようである。所が野畑謹爾篇の、川柳大全

(昭和四年三月京都洛東書院発行)を見た所、扇をつとり道をきく弁慶、と言うそれらしいものが一句載せてあった。これからみると他にもありそうな気がする。因に勸進帳はもととも能の安宅から取ったものでこの能は永享七年頃に観世小次郎によって作られた天保十一年並木五瓶によって劇化されたものである。ついでに義経に因んだ句を少し挙げてみる。

腰越えでものを喰うのは馬ばかり
吉次が荷おるせば馬はいでみる
さか落しまでは判官ぬけ目なし
熊谷はまだ実の外のらぬ首をとり
梶原はこころの入る歌人なり
清盛の医者ははだか脈をとり
判官はどれだと陸へ参でさし
一門はどぶりどぶりと奏問し
清盛はねまきの上へ鎧を着

大同の石仏

— 大陸放浪 —

東野 大八

古い「川柳雑誌」の表紙に、大同の石仏の写真が載っている。そのふくよかな膝のあたりにボツンと黒い人影がある。路郎先生の姿である。

この写真の撮影者は、おそらく張家口にいた岩崎柳路だろうと思うが、この先生に先だつ少し前、私も大同のこの石仏へ出かけたことがある。

古都大同は、当時、駐蒙軍の要衝で、かなりの兵隊が駐屯していた。街の目抜き四辻には、古びて色のさめた牌楼があり、そこからどこへ出てきてもつかい山城を仕切る土の胴壁に行きあった。街の家並は、ごくありふれた中国人の商家がほとんどなのだが、朝北の烈しい風雪と、胡砂の風塵に押しもまれて、一様にどんよりとした、それだけに古色蒼然とした建つてつものものが多かった。

しかしながら、無風流な一旗組の日本人は牌楼の下であらうと、古刹の門前であらうとおかましく妙な立看板やちようちん、のれんをぶらさけて、甚だ臆面もない。カフェー銀座、おでん千日前、御料理はかた、なんてえのが至るところにある。何で儲けているの

か、在留邦人が、兵隊たちもまじえて、まっぴるまから酒をのみ、そしてうたい、わめきたてていた。

満鉄の調査団五、六人に特別参加の私を入れて、石窟へと出発したのは、ニレや楊柳の木立が青々と芽ぶいた春三月のころであつた。

「大丈夫ですかいたった一台で、昨日も土匪に県公署のバスが襲撃され、ケガ人が三人も出たそうですよ」という通りすがりの日本人の声を、やがて後ろにきき流し、若い私はトラックの尻からはい上った。

「私しや、学生時分から夢は、雲崗の石仏と、アンコールワットを一眼みたいということでした」

と肩を並べて、トラックの後へりにもたれ合つたおとなりの、中年の紳士がこういう。

「石仏にも、どれぐらいかかりますかね」と前にいる一人が、不安そうに私をふりかえり。さあ、二、三時間とみりやあ、いいのじやないですか、匪賊をよけての安全運転だそうですからね。へえ、そんなに長く、出ま

せんかね、汚いホンホーズが。ご心配なら下りやあいいでしょう、とこちらは意気こら然という。

やがてカーキ色の、ボロトラックはエンジンから煙をあげて走り出した。一望の草原とうねうねとつづく赤茶けた丘陵の折り重なり。ものの三分もいくと、もう四囲は、家一つなく、人影のカケラとてない。時折、野兔がついついと、その天地をよぎるだけだ。走つる間に、目指す大同の石窟の説明をかいつまんでやつておこう。

ころは魏の文成帝の世（四五二年）で、彼は道教に疑るあまり、仏教は不用といひ出した。それを道教の布教師崔浩というのが、武帝とあがめられている立場をいふことが、文成帝に廢仏棄釈（はいふつきしやく）令を布けとせん動した。調子に乗つたそのミカドは寺をことごとく灰にして、坊主を追放、または還俗させた。ところが、疊曜というエライ坊さんがいて、ミカドの親せきで、反道教派の仏門の連中をときふせ、歴代の皇帝像を世に残すことを説いた。結局、帝像を崇拜することによつて仏道は世に残るとみたわけである。仏さまの世界とて、かくりも必要だという見本のような話だ。雲崗は、魏の国都平城から、王族の出生地盛樂への道すじに当る。すなわち大同の西方であつた。

かくて和平元年（四六〇年）まず五窟を掘り、魏の始祖以来五代の帝像をなぞらえた五仏を作つた。つづいて十五の大窟が掘られ、それからそれとアナのオンパレード、延長二キロにおよぶ雲崗の大石窟が完成されたというわけ。

話はこれぐらゐにして、原野をただ一台でぶつ飛はすわれわれ一行だが、やつとのこと

で、目指す現地へと無事たどりつくことができた。もともと、現地のそば近くで

「あつ、出たッ」

と前の男が絶叫してひっくりかえるというおまけがついたが、青くなった一同がよくよくみればそれは、日本の兵隊だったのである。

「ようこそ」

と見習士官の隊長が、ニコニコ顔でわれわれを迎え入れた。

「もう二カ月もここを準備してらんですがね、石仏を毀すべからずという命令なので、土匪が出るまで表へ出てケンカです」

一体、幾人か守ってるんです、ときくと一個小隊だという。給与はまずまずだが、夜は陰気なローソクがこたえる、とこぼす。

やがてわれわれは、その隊長の案内で、各洞窟を一かたまりになって回った。

奈良の大仏の倍ぐらいの立像や、その兄弟分のような巨大大仏を幾つもみて回る。しかしどれもこれも真暗で、じめじめした空気が陰惨なまでに洞窟に立ちこめている。案内人は部落の子どもたちで、彼等はいくつにタイムツを手にかけている。一本いくらと料金をとられるわけで、その火の光りは、一本で十分間ともたない。長く燃えてると儲けが少いからだ。

巨仏群は、火の見やぐらのような、木台に上って眺めるのだが、高さは腹の位置のところにしかない。メラギンなる、危い板ワクのへりに立って、ケラメラと火の粉を落すホノホの明りで中天を見上げる。金バクの仏顔が、隠やかに見下しているのもあれば、カッと眼玉をむき、そこにいるのは何奴なるゾ、とどなりつけている様な顔もある。

中窟どころは、等身大のから、こども、こ

びと、といった石仏、木仏の巢窟である。ペロリと顔がむけてないや、一房のパナナを背負ったような千手仏があるかと思うと手足があつて首がない。その逆さのやら、首だけが石壁の中間に、宙浮りになったものもある。チミモウリヨウ、妖気はソクソクとしてみるもの肌に迫る。

そんなビクビクの私たちが面白いのか、夜目になったタイムツ売りの子供たちは、パッと天井に向って小石をなげる。パラパラと落下するその一つをとりあげ、ああ、金バクだよ、と客どもにひけらかす。

露天仏の石の巨像は、その点、明朗大慈悲である。健康優良児のムードで陽をあびてやあ、いらっしやいと声をかけそう。

やがて、一同揃って露天仏前で昼食となつたが、一人が

「石窟の仏像は、すべてインド的ですね、仏師がインド系じゃあないですか」

「左様、半分はね。しかし、漢民族系の石工もまたいたらしいことも事実です」

学究派は、めしを食いなが早くも、初步的文化材分せきの議論をおっぱじめ出した。こちらは、ブン屋の方なので、至極淡泊明快、俗気十分。

「ねえ隊長さん、表に沢山でいるこの辺の部落民ですね。あの連中の中の女の顔は、なぜかのように、冬瓜的ふつくら型なのではないかね」

「貴方もそうお思いですか、こりやどうも。実は私はね、ここへはじめてきたとき、表の露天大仏と女たちの顔を見くらべて、これを作った仏師の石工は、この辺の女の顔をモデルにしたのではないか、真剣かつ確信をもつてそう思いましたね」

私はいきなり、眼鏡をかけた学生、学生したその隊長に向き直り、大きく握手を一つして、

「石工はここで恋をしたんですよ、恋を。女も憎からず思った。女は毎日、石工のしんしん、仏づくりの顔にみつめ入り、そして石工は毎日の如く、女の顔から真実をそぎ取り、愛情をくみとり、そしてそれがいつか双方の微笑を誘っていった。恋とはこれが、だがそこは仏を作る清浄な職分ですよネエ、これが出来上り入仏式でもすんだなら……」

若い隊長は、いつか軍服を着ているわが身を忘れたような顔つきで、フムフムと熱心に相づちを打ち膝までのり出してきた。私はますます、興に乗り、語り口も佳境に入っていくと、突然、一人が

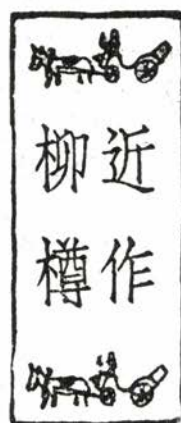
「君は一体ここへ、視察にきたのか、それとも皇軍慰問にやってきたのか」

と笑いながら大声を出した。みると責任者の視察団長だった。ドッと笑った一同へニタリとしたあと、若い私はつい真剣な眼顔でみなさんに対してこういったことである。

「千体か二千体か知らないが、その中には一人や二人、若い石工がいて、おそらくこの地の乙女と恋の一つや二つは拾ったことでしょうよ。いや、これは絶対まちがいありません。彼等も血の通った人間なんですからね」

「川柳雑誌」のバックナンバ―

「古稀特集」や「四百号記念」ほか残部少々あり。川柳塔本社へお問い合わせください。(終刊号は売り切れしました)



若本多久志選

出雲市 王

紫

涙ではない玉葱のみじん切り
信心が足らぬか線香燃え残り
落葉して公孫樹の高さ空の碧
十円貨入れ入相の鐘を撞き
倒産へ不徳を託びる人間味

大阪市 小 谷 葉 子

額の位置替えて勤めの朝を出る
八方美人 人それぞれのテクニク
寂しさのひとつにきょうも便りなく
スタジオでみのりスタジオで別れ
ひとり寝へ午前三時の秒きざむ

姫路市 前 田 美 巳 代

名鐘をとぎれとぎれに除夜囲む
曼珠沙華妖姫の如く咲き狂い
酔痴れるリズムに今日も明日もなく

厳しきへ翁の能面の穏やかさ
なんとなく鏡にうそが欲しい今日

米子市 八 木 千 代

つましいデートうどんを吹きながら
稲上げも終えて挙式の日が待たれ
手をついて母とりなしの顔となり
子に見つめられて紅刷く手が止り

奈良市 村 上 春 己

悠悠と湯舟をまたぐ男風呂
ポリ容器の漬物母の味でなし
シーズンオフ大仏さまがよく拝め
デザートに鹿はみかんの皮を食べ

竹原市 小 島 蘭 幸

トランジスタラジオトイレで聞いてみる
働いているから不満少しい
鍵ッ子へ一週間の長いこと

お好み屋 水 水 水へ忙しい

七尾市 松 高 秀 峰

事故現場お守り袋なげ出され

公約は粉骨碎身汚職もし

元旦の勤めも生活かかつて居

一票を見込む賀状も二三枚

松原市 谷 垣 史 好

茜色の空何かに祈りたく

運命に逆らうように風に立ち

飼育しながら甲斐性がないと言ひ

退 院

四五日はお客のように扱われ

千葉県 鳥 飼 春 泥

大きさは後樂園を例に出し

角かくしやはり女につのがあり

平社員夢で課長のクビを切り

食パンの意志は通ぜずジャムと添ひ

高槻市 山 田 ス ミ 子

倅せを祈ったテープ海へ切れ

野菊淋しく初雪に耐えて咲き

寝静まってから子の進学を話し合ひ

進学の意志はまともに聞いてやり

島根県 堀 江 正 朗

見えぬので耳まで遠くなるあせり

ついそこにあるのに手さぐり遠ざかり

ぼんやりと手持ぶさたな妻の留守

里帰り抱き癖つけて戻つて来

島根県 堀 江 芳 子

目で合図出来ぬ夫のもどかしく

盲人会は気兼ねがないと嬉しがり

気まずい日夫も黙って手をつなぐ

安らかな寝息めしいとみえぬ夫

鳥取市 中 田 吉 春

柔道着脱げばやさしい娘に戻り

病院のビルも見晴しいところ

名刺には社長御用聞きにも出

受付嬢社長の様な顔で聞き

高知市 永 野 舞 子

言論の自由皇室の私事にふれ

日曜の門をねまきが聞けに来る

助け合い私も助けて欲しい暮

気の早いネオンが夕焼まぶしがり

大阪市 江 城 功 雄

夜の雨生きねばならぬ屋台押し

哀歎の埠頭無心にドラが鳴る

緋と身に老いの佗びしさ落葉焚く

妻の手の荒れへ心の中で詫び

宇部市 櫛部 いさ夢

脱ぎすてたままチャネルを廻す妻

お茶お花猫まで飼って日々多忙

三人目もう子宝でないくらし

指の傷無口な夫が吸うてくれ

羽咋市 三宅 ろ亭

ヘーゲルは巧いこというアフヘーベン

自他分離自他合一の境いまだ

髪結えば妻別人になって見え

選挙ボス今度は民社党につき

高知市 岡本 香芳

橋下の人生みぞれに口笛吹き

焼酒を片手に仰ぐ橋高し

ボロ車橋下に横たう雪の暮

愛媛県 関本 柳剛

地に落ちて尚も松葉にある契り

別れ道歩巾に好きという乱れ

病み馴れた心の掃除 除夜静か

摂津市 河本 雪男

じわじわと不況が肩にのしかかり

小企業師走の風にちぢこまり

遠き日の思い出雲が流れてる

岡山県 瀬戸山 文平

天職へ感謝寒さへ立ち向い

視線もう合わすところへ来てしま

腰かけてならず他人の椅子だから

布施市 坂東 若芽

師走だというに白雲悠々と

人間の弱さにも似て犬は吠え

ちびりちびり何か嬉しい日のお酒

竜野市 森下 峰子

デモも見て来たと東京から帰り

土を捨て親捨てた子に餅送り

進学の力も知らぬ親の無理

愛知県 横 紫光

おはなはんの再放送へ又座り

鉢植にされて唐辛子面くら

ツケの店キヤツシユで出せば訳を聞き

鳥取県 鈴木 村諷子

ビタミンが何とかなので麦を混ぜ

忿懣をガンと言えない独り言

この家に朝起きという血が流れ

松江市 永原 鳳人

母さんを励ます役を子に頼み

肺活量千三百の安来節

病みつつも女ルージュの身だしなみ

松山市 西川 みやこ

中年の眼と眼が競うPTA

ジンギスカン囲む河原は秋の色

YS十一号墜落

肉親を想う花束波にゆれ

高知県 山 川 勝子

あてにした日曜大工は風邪で寝る

丙午産まずにすんだ十二月

八十五で死んでも家庭に穴があき

米子市 石 垣 花子

糟糧の妻という名が耐えさせる

家中の鴨井が低い三男坊

霧笛だけ聴えて浜は暗の底

東京都 浅 野 竜 泉

ぐち一つ聞いて課長の判を取り

妻の愚痴今日も胎児は聞いて生き

この人にこんな癖あり酒の席

倉敷市 水 谷 谷 水

十八番妻子よしばし眼をつむれ

生きるすべ自殺未遂に教えられ

雑草もうちの庭では雅趣があり

尼崎市 平 井 露 芳

家までのペタル保温のコップ酒

つきまとう不運一縷の灯に生きる

金欠と貧血仲よう同居する

大阪市 武 居 寿 美 司

去る年のよい思い出を書きしるし

反省の場は仏壇の前ときめ

割当の内職終り暮迫る

島根県 小 砂 白 汀

柿一粒残し梢のアクセント

抗うて泣かせ孝行して泣かせ

紅葉せぬ松も錦が着たかろう

高知市 田 内 文 子

あの胸に抱かれて泣いた日の記憶

乗り越を起されているはしご酒

東京も雪です故郷の母を恋い

河内長野市 森 本 黒 天 子

ゆけるとこまでと退職肚をきめ

尻軽に動いてやればあてにされ

墓地を求む

一坪の地主顔して父眠り

広島市 上 代 美 文

元旦の出勤靴紐しかと締め

支持率がなんぼ減っても総理なり

交通禍タネに保険屋強気なり

仙台市 川 村 映 輝

永住と決めて本籍もつてくる

共稼ぎの収入だけをうらやまれ

言い訳を酒の肴に聞いている

竹原市 時 広 一 路

一級と言われそうかと酒の味

はだされた気持の裏にある慕情

雪国の春にうれしい土の色

竹原市 三 宅 不 朽

肌で知る読経のサワリらしいとこ

子に言うた通りを母に叱られる

言い過ぎを結果としては喜ばれ

島根県 石 田 清 泉

新聞にチラシはらんで来る師走

ボーナスへ妻の注文多過ぎる

十二月街の動きも蟻のよう

竹原市 脇 本 政 己

大晦日に貰う賞与はたかがしれ

情熱もうすれ不惑の悔多き

子煩惱風呂で本気に子と遊ぶ

広島県 高 橋 鬼 焼

娘も二十指輪の過去を知りたがり

花鉢男器用に花をいけ

ボーナスが少し不足な妻の酌

鳥取市 藤 本 征 也

すねてみせ男の愛をたしかめる

現実裏の裏あり面白し

さも味方らしいつけ口聞き流し

鳥取市 藤 本 鎮 也

故郷の香り運んで来たわかれ

若い者にまだ負けぬ気の鍛をふり

弱点を知って女泣いてみせ

大洲市 堀 内 暁 風

涙まで出した話に裏切られ

そのつづき見たい楽しい夢がさめ

絶景をほめてここで一休み

大阪府 石 田 水 郷

信心の生駒の山で深呼吸

数学に飽いた寢床で課題吟

パトカーが帰るアパート浅く寝る

下関市 志 賀 木 石

やれるだけやったと思う除夜の鐘

煙草やめた目に灰皿の汚ならし

疎外されぬように年とる工夫する

新潟県 高 野 不 二

齢四十正月がまだ嬉しくて

酒やめてから飲む会の多いこと

世の中も逆さにみれば面白し
羽曳野市 高 杉 鬼

奥さんは留守隣から鍵が来る

茶もいらぬ客に合図の顔を振り

竹割った気性で借金たのまれる

伊丹市 貴志千尋

皆までは言わず社長否決印

買わぬより確率はありくじを買う

残業の夜更を妻とつつく鍋

鳥取市 近藤秋星

屋根替えをした夜の雨はリズムミカル

雪景色眺めておれぬ年の暮

大阪市 小東琴女

ドブ板の裏でこおろぎ秋を告げ

発展的解消ということでケリ

大阪市 和田痴亭

お隣りの猫のデートが眠らせず

あきまへんあきまへんでビルを建て

米子市 林瑞枝

新婚の宿の料理をまだ憶え

父祖の田を守る決意の辞表書く

善通寺市 伊藤歌子

清姫の執念いずこ日高川

道成寺住職の話聞き惚れる

北九州市 大沢伊三郎

ロマンスの有った顔でなし老社長

土地訛り聞くと楽しいローカル線

桜井市 岩本雀踊子

他人様世間様がとせまく生き

たった一つの取柄を母が知っていた

松山市 河本南牛史

お隣りと不仲の種は犬が蒔き

お墓にもさよならをして再婚し

京都府 菊沢破天

立退きをせがまれてるのに巣をつくり

おもちゃ箱小さな権利争らそうて

愛媛県 燈本満子

ふるさとへ錦なくとも誇りあり

身の上相談へズバリと第三者

鳥取市 藤本佳女

銀婚の旅銀婚の連れが出来

道連れの話しみじみ己が幸

北九州市 藤田独楽

おはなはん駅のテレビも人だかり

拝観料同じお寺で二度取られ

西宮市 船津千夏

寒風を颯爽と膝上10センチ

先生は実力行使暴走中

堺市 羽田一扇

注文の電話へ応待交って来

セーブする先から注文又入り

羽曳野市 菊地茶坊

人生の無駄歳暮に気をつかい
特売場横で食堂待ちかまえ

羽曳野市 麻野 幽玄

船酔へ情容赦のないうねり

手の荒れに触れて内助の功を知る

岡山県 目賀 芳月

アベックにあほらしくろう仁王様

二字訂正されて人生曲り出し

泉佐野市 大工 千代

バーマ屋の年の瀬だけはお世辞抜き

次に空く席を眼顔で知らされる

尼崎市 中谷 利美

話わかる叔母で少しはいける口

愛妻でないが寝込まれても困り

八幡浜市 別宮 すすき

鉄塔の先に名月ささえられ

亡年会つづく夫にやつれみえ

大田市 藤田 軒太楼

追込みへ必死受験の灯がきびし

共学の見栄がズボンを寝押しする

八幡浜市 山本 初子

碁に将棋マージャン今度は石磨く

死んでまで貧富の差別ある墓石

カリホルニア 斎藤 流路

この人も褒めれば笑う顔をもち
安時計安ものらしい音をたて

布施市 晋本 幸子

齢きかれ素直に言えぬとしになり

大阪市 西本 保夫

テレビ故障勉強させるよいチャンス

三次市 和泉 松風

その手先女らしさを感じさせ

鳥取市 山口 昭好

ベトナムで小さな花が今日も散る

島根県 大森 孝華

寒風に堪えて山茶花つよく生き

鳥取市 細谷 勇仁

氏神の石段高し落ちつばき

尼崎市 後岡 としみ

反省はしても後悔せぬと決め

名古屋市 花東 千久良

妻の愛に深彫りの齒形

茨木市 高木 繁太郎

防虫剤忘れたウールの穴へ指

愛媛県 豊島 二九三

飲めぬのも四五人いれて忘年会

いのちある句

(8)

戸田 古方

同じ「川柳雑誌」二一五号に「犀利縦横——一人一句評」がのっている。
平民の先祖は斬られ損だった 玲之介

鳥羽伏見の戦火が燃え上ろうとする時、幾百年の伝統を誇る西陣は潰滅に瀕した。假死の状態が続いた。御一新の後死に切つていなかった幹から新しい芽が元の大木に蘇り、百年たった今日また非常時局と云い斧に逢わんとしている。

この句を単に斬り捨て御免にぶつかった先祖への淡いセンチメンタルに終らせたくないと思えるのは詠史眼から見たドグマだろうかと当時、詠史にこつていたので、書くことも少しかたよつて思うに思いますが、西陣史を暗示しています。これを歴史物語風にすれば山崎豊子さんの大阪の昆布問屋の興亡を素材にした「暖簾」も句にもなりそうです。
トーカー初期、たしかルビッチの作品でしたか「私の殺した男」というのがありました。ファスト・シオンは隻脚の逆光線の太写しの間から、パリーがのぞいていたことを憶えています。彼の殺したドイツ兵の家族に逢つて「私が殺した」と告白するところがクラ

イマックスになつていました。
根よく探せばこういう葛藤をあつた川柳もみつかりはせぬかと思ひます。

貸家礼唐様でかく三代目

古川柳

市井の川柳にちがひありませんが、大正史を語る時よく引合に出して来ましたが、明治はとにかくバックボーンがありました。昭和の敗戦はお祖父さんの屋台を台なしにしてしまいましたが、昭和の罪だけなんではいまいか、私ども明治末に生れ大正時代に成人して、昭和の今日まだ生きのびているものには責任なしとは申しませんが、この眼で見、この耳できいた大正時代のことを考えざるを得ません。第一次大戦前東洋のマンチエスターを憧れていた大阪はマンチエスターを追いついて世界の綿業都市に文字通りなつてしまひました。黄金の洪水。岡本一平さんの漫画に百円札を燃して玄関の履物を捜しているのが印象に残る時代でした。この大正のリベラリズムが昭和のファッションにつながっているのです。つまり大正時代も責任の半ばは負わねばならないというのが私の講義です。「唐様でかく三代目」をここまでひっぱつてくるのは行きすぎかも知れません。しかし考えてよくと何かびたりとするとところがあるのです。

とにかくこの句にはわずかに十七音字とはいえ、親、子、孫の三代を詠い上げております。そういう句も、

決して少くありません。さすがに島崎藤村の「夜明け前」やモーパッサンの「女の一生」の句も見つかりそうですし、これから出てくるかも知れません。

最近の私の句に

戦争史そこから歴史かわりかけ

というのがありますが、足軽中心の織田氏の鉄砲隊が武田の一騎当千の荒武者をしりぞけた長篠合戦を想像しながらの作句でした。それから近代城郭が産れ、日本の近代史となりました。一大ロマンです。トルストイの「戦争と平和」の句を期待するのは大それたのぞみでしょうか。

そろそろ、もう筆を擱こうと思いますが、最後に表題の「いのちある句」に結びつけねばなりません。

お買物は近鉄へ!



アベノ・上六
近鉄

アベノ 621-1231 上六 771-3331

織田信長 (上)

富士野鞍馬

桶狭間合戦

そのころ、戦国時代の武將は、誰もが、京都へのぼって、天皇と將軍とを擁して、天下を統一することが、希望、理想であった。駿河の今川義元もその野心に満ち、途中の国々は踏み潰して京都へのぼる計画を立て、永禄三年(一五六〇)五月十二日、四万の大軍を率いて、府中(静岡)を出発し、攻撃を開始した。

その時義元は、尾張の半分の土地を守っている信長などは問題にしていなかったのである。清洲の信長は、受けて戦うよりは、出でて攻撃すべしと、三千の寡兵で城を出て、まず熱田神宮に戦勝を祈願した。

伝説では、この時信長は、あらかじめ銭の裏を出して二枚ずつ糊で貼り、それを神前で投げて、祈願の通り全部裏が出たと、神祐われにあり、戦いは勝であると士卒をばげまして出撃したといわれている。川柳もそれを詠み、

両なめの銭は明い智の謀事(一一九三)
此銭はただし両なめかも知れず(九四一三)
かたのない智謀熱田の御賽銭
(四二一五八〇二一〇八八)
なめかたで織田程勝ったものはなし
(一九九)

ナメは銭の裏、カタは表で「なめかた」という銭の表裏で勝負する一種の賭博があったので、それにかけて作られている。そうして、今川軍の前面に兵を出し、本營

織田氏世系

日本外史には次のように書いてある。

「織田氏は平重盛より出ず。重盛の次子に資盛と曰う。元暦中、平氏は源氏と西海に戦い、大いに敗れ、挙族死亡せり。資盛に孤児あり、越前の織田の莊の祝人(はうり)の養う所となる。兄は終に織田氏を冒し、親真と名づく。子孫は世々祝人たり。足利氏の天下を定むるに及んで、越前、尾張は斯波氏の管国たり。斯波義重嘗て出遊して歸り以て近臣となせり。義重に大吏六人あり。其の一人罪ありて放流せらる。すなわち織田氏を以て之に代えぬ。ここにおいて、織田氏は終に斯波の重臣となり、尾張に徙れり。而して後十八世は、即ち信長なり。」

清洲城

織田信長は、尾張の守護、斯波氏の重臣織田信秀の子で、天文三年(一五三四)甲午の生れである。

天文十一年(一二五四)父信秀が、今川義元と戦ったという小豆坂は、岡崎と藤川の間にある。

小豆坂あんの如くに突さくづし
(八七一七)

小豆坂一粒えりの古戦場 (一〇九五)
と川柳に詠まれ、この時信長は九才であった。

油売りでも仕出したは道三
(三九一六七八七)

天文十六年(一五四七)に信秀は、美濃の斎藤道三(道三は元油売りであった)と戦って負けたのであるが、その時信長は十四才の初陣であった。その和陸の条件に信長は、道三の娘濃姫(あつひめ)と結婚した。そして天文十八年(一五四九)父信秀は死んだので十六才で家督相続したのである。

天文二十四年(一五五五)信長二十二才、宗家の清洲の城主織田彦五郎が庄迫したので逆に彦五郎を討って、信長は清洲城に入ったのである。

は桶狭間おけがま（正しくは田楽狭間）ときいて、奇襲を決心して、背後から廻り、折からの風雨に乗りて、せまい谷間に休息していた義元勢を攻撃した。義元が退却しようと馬に乗るところを、毛利新助秀高が突いて首を取った。しん介にやりつけられるおけはざま

（安五信3）

底抜けいくさの軍をしたは桶狭間（二九28）

桶狭間一度にたががおっぱじけ（五六33）

桶狭間蓋をする間もあらばこそ（四九5）

桶狭間ついに勝利を得ざると（二二15）

底抜けてからと崩る桶狭間（二二40）

やぶられてばらばらになる桶狭間

（九一23）

今川は末期の水を桶で呑み（六九11）

樽拾ひ底をぶち抜く桶はざま（八二14）

などと川柳に戯作されている。

今川の愚息とむらい軍せず（二二45）

日本外史はここで、

「駿河の軍は遂に大いに潰えたり。信長は追撃し、その精騎二千余級を斬りぬ。すな

わち熱田に賽して還れり。士女路をはさみて迎へ見る。信長は、義元の首を馬前に掲

げ、清洲に凱旋せり。大高、省掛の諸城も皆解走す。信長これを以て名天下に聞えたり」

と書いている。時に信長二十七才。義元は四十五才であった。さつと軍を返して、清洲城へ引きあげたことはあざやかなもので、この一戦で信長の地位は確立し、やがて徳川家康と結び、美濃の斎藤を亡ぼし、後顧の憂いをなくして、天下統一の歩武を進めたのである

たわごと

小谷葉子さんに

川端東雲楼

昨年十二月号の「九輪水煙」に白柳先生のお言葉で「一年はアツというまだが、発達の日の葉子さんのつかれきいた目を見ただけで本になるまでの苦勞がよくわかるのだ」とありました。

領収書などに「小谷」という印があったのを思い出して「近作柳樽」を見ると「小谷葉子」という女流作家がおられることに驚きました。き、ご筆せきも男の方と思っていただけに驚きました。

名刀を大上段からサツと切りおらされるような川村好郎先生のご選句に上席へご登載になりお祝い申しあげます。

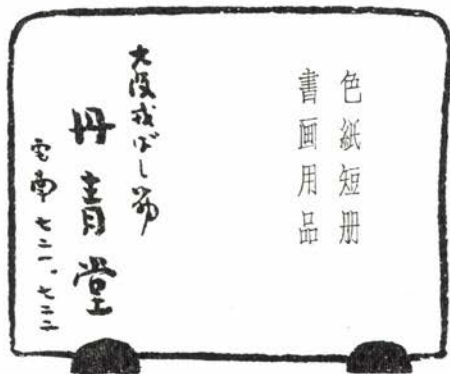
適当にあまえて妻のおるかなり 葉子

私は昨年九月で満七十三歳になりますが、私より九つも若いのに妻は昨年の年越しの日に急逝いたしました。

四季それぞれに色の変わる庭の樹々にも無情を感じることもございます。貴女の名句を拝承してうたた感慨に堪えません。精一ばいの世帯をひっさげて、愚痴一つこぼさず「弱みそ」の夫にいたわりはげまし仕えてくれました妻をしのぶことしきりでございます。

パートタイム一息入れるモカの味 葉子

この名句にも感心いたしました。
美人だが黒一色のつめたさよ 葉子
あなたのお人柄がわかったような気もいたします。作家としても私の敵ではないと悟りました。さすがに本社の先生方の中におられるだけあってと敬服しております。
私にも娘が四人おります。新憲法に則って不田先生の名句どおり、
わが姓は一代かぎり それもよし
という生活でございます。いよいよ老境に入り、将来の伴侶であった妻に先き立たれ、今ここにあなたの名句に接し、ありし日をしのんでおります。





写真・前列左から右城暮石・秋田実・宮村泰彦・清水白柳・不二田一三夫・後列左から柳貴子（楠本和二郎氏代理）・中筋三幸諸氏・（中筋美奈子氏撮影）

秋田実先生を迎えて

— 和歌山短詩型文学クラブ —

不二田 一三夫

「秋田実先生のご講演があるのに寝てはおられない」と発熱をおしての中筋三幸氏のあいさつである。

和歌山短詩型文学クラブは、文字どおり以前は詩・短歌・俳句・川柳と、四部門があったが、現在は俳句と川柳だけになった。

忘年会会の俳句と川柳の優勝者から楯が返還される。俳句の部は西尾公作氏（川柳塔同人）川柳の部は二越俊爾氏（川柳塔同人）だった。ここの会員諸氏は柳俳二刀流である。

昨年度俳句の部の最優秀句は浜光治氏（川柳塔同人）川柳の部は西脇芳子さんの領収書貰って付けて飲み直し

それぞれ賞状と楯は俳句の講師右城暮石氏から、また川柳は講師清水白柳氏から授与された。

これらがすむとお待ちかねの秋田先生の講演である。多くの知るかぎりでは、秋田先生

川柳塔同人十氏を擁する和歌山短詩型文学クラブの新春句会が一月四日市内の料亭朝千鳥で開かれた。

この新春句会に、秋田実先生にご講演願えないものかと、昨秋から白柳氏に頼まれていた。先生はご承知のように、執筆に放送に講演にご多忙な方なので、実現はむずかしいと思っていたが、ころよくばくの顔を立ててくださった。

四日の午後二時ごろ白柳さんが拙宅へこれ、その足で車をやっと拾ったところ、暖房

のない小型だった。先生のお宅へ行ってから別の車とかわるつもりでいたら、白柳さんもぼくも先生のお宅ははじめてなのに運転手クンは存じあげているというのだ。これですっかり気に入ってしまっただけでそのまま和歌山の会場までとはしてもらった。

会場の朝千鳥の表に、秋田先生のお名前が大きく赤字で出ていたので、ひよっとして新聞社が、かぎつけないかと心配した。

会場へ一番乗りは大阪からで、すぐストープにかじりつくことだった。

定刻の五時をすこし回ったところ三十余人の会員の方々の顔がそろったところで開会となり、司会者が、主宰の中筋三幸氏が風邪で欠席されることをこわっているところへご本尊の出席という、愉快なタイミングのよさが会場に爆笑をよび、願ってもない開会のフアンフアーレとなった。

のご講演といえは、何百人という大聴衆を前にしてが、この会場ではそうしたざわめきというものが感じられず、膝つき合わせて話をきくといった、これはまた別のムードで楽しいことであった。

先生に師事して五年ほどになるが、漫才の起源という、このようなお話はばくもはじめてだった。帰りの車中で先生からうかがったことだが、こういう話はめったにされないのだそうである。そこはご出席の会員の方々がみな名士ぞろいということにあったと思うが正にとっておきのお話であった。

現代漫才の始祖は玉子の行商人で、河内音頭や江州音頭取りで名声をあげていた玉子家円辰（慶応元年—昭和十九年、八十歳没）であることや、現代漫才の歴史は六十年だが、漫才のかたちで、二人で舞いを舞って、天皇の長寿を祝ったのは大正年間、つまり文武天皇のみ世で、今から二百六十年も前のことだった。この二人が太夫と才蔵の役割りをしていったようである。

徳川家康が將軍になり三河万才の活躍から古川柳の、

ご祝儀がすむと娘は奥へ逃げ

というように、町家でやる時はお色気が織りこまれていたようだった。

各地を回わる太夫と才蔵が敵状をさぐる隠

密になったことなども記録に残っている。

大阪の漫才が東上したとき「名古屋万才」ではおかしいから雁玉師が高級万才と改め、またばやきの都家文雄師がその後文化万才とし、現代の漫才になったのは、漫画、漫談、漫才の三漫時代にあてたのである。

この講演の中心になるものは、シロウトの音頭とりが、プロの寄席進出なるまでの苦心のかずかずだった。先生は漫才発展に一生をかけていられるが、一言、一言がみな漫才へのたぎるような情熱と愛情に満ちていた。

スペースがないので気ままに書かせていただいたが、当時の庶民生活の一端がうかがえしかも底には川柳と相通ずるものがあった。講演がすむと俳句と川柳の入選発表である

川柳「女優」

- ③ おしほりへ女優耳たぶ拭いただけ 三幸
- ② 女房もデコもひばりも共に老け 康郎
- ① 強盗の記事で女優の年を知り 清和

川柳「小銭」

- ③ 算盤を又使わせた小銭なり 三幸
- ② 袂くそはさんで小銭顔を出し 和三郎
- ① 釣銭の小銭がなくてまけただけ 泰彦

川柳「墨」十分間吟

- ③ 墨で書けば候文にしたくなり 太茂津
- ② 慶弔のほかは用なき硯墨 昭夫
- ① 悪筆を墨に負わせて子は帰る 英

右の九氏に清水白柳選者が賞品をわたされた。この三題の第一席入選句から新春句会の優勝者がきまるのだが、栄冠は「釣銭」の宮村泰彦氏が獲得された。

俳句の栄冠は楠本和三郎氏（川柳塔同人）

なお川柳の部の上位入選者のうち三幸氏2、太茂津氏、康郎氏、和三郎氏は川柳塔同人。

会場風景を手なれたかまえてシャッターをきるのが中筋三幸氏令夫人美奈子さんである。上品で和装がよくお似合いの美しい方だ。優勝者をかこむ記念写真に、はいっていただきたかったが、優勝するまではいらないとおっしゃった。ご立派。

俳句、川柳ともに披露は三幸氏がされた。会員の方々は、飲みながらたべながら、その披露を聞くという、うらやましいシステムである。

閉会後、東和歌山駅までハンドルを握ってくださったのが、ナント和装の三幸氏夫人だったのには二度びっくりだった。

直原玉青 著

「新しい南画と

俳画の描き方」

創元社出版
価 二千円

本社でも取次ぎいたします。

初歩教室

題「故郷」

菊沢小松園

故郷いい課題である、併し、大阪に生れ、大阪に育ち、大阪に住んで現在に及んでいる私には、所謂、故郷なるものの、感懐はない。毎日忙しく、目眩るしく、遽しさの中の、明れ暮れは、あわれ故郷を持たぬ幾百萬の都会人を慥えたのだ。故郷というイメージには遙かに遠い、日進月歩の精力で変化を続けている大都会には、山川草木的な懐しさを、印象つける何物もなく、又そうしては生きて行けないほど、厳しさがあつた。その私がこの題を担当することが、すでに矛盾といふものであるかも知れないが、努力はしたつもりである。

故郷から見合におわす便り来る
比呂路
ふるさとのたよりあの娘も二児の母
竜泉
ふるさとが近づく汽車の国訛り
要次
泥沼に落ちて故郷の夢ばかり
要次
ふるさとの便りでは一人前にされ
保夫
故郷へ長蛇の列の人となり
白汀
第一句、都会へ出た適齡期の子を案じた親

ところが、それとなく見合いをすすめる便りをおこす此処にも故郷との縋りを思う心が窺える、におわすがこの句を生かした、第二句あのまま国に居ればあるいは妻になつていたかも知れないあの娘も、すでに二児の母とか、こころ疼ずく故郷のたより、第三句、同郷のよしみ、故郷の近づく汽車の中に、国の訛りもだんだん派手に多くなつてくる、心も浮き立つ場合の懐しさの有様もよく現われてゐる、第四句、都会で転落した女のお定りの場所と思ひ通うは故郷の夢ばかり、暗い場面ながらこの娘が、故郷の夢も見無くなつたよりもっと、救われまい、第五句、都会のたよりを信じてゐる国許の人達の、正直さがよく出てゐる一人前にされた嬉しさより、迷惑さが面白そに川柳がある、第六句、帰省列車の情景、年末の駅頭に見る長蛇の列は毎年のこと乍ら、目を見張せる、だがこの句からは感銘は薄い、報告に忠実すぎたか、郷愁を見抜いたような荷が届き
千代

郷愁の夜は少年の眼に戻り
郷関を出て三年のドヤ住い
汽車の窓故郷の山河見えはじめ
同
啄木と同じ故郷をあとにする
寿美司
汽車賃があたり故郷を遠くする
英己代
すき

第一句、望郷の念止み難く切きりに、彼を想ひ是をおもう時、故郷からの荷物が届く、丁度その心を見透かしたように、そこに親や兄弟の温さが滲む、いいテーマを掴んでゐる、第二句、故郷のことを思い煩う夜は、純情さ可憐さは、少年の頃の眼に戻つたよう、都会擦れせぬ青年の一端をよく、手際よくまとめられてゐる。第三句、志を立て故国を出たが知らぬ都会の荒波は、そう生優しいものではなかつた、三年は夢と過ぎて、未だに安宿住い、短い十七字によく一片のドラマを慥え上げた。第四句、帰省する汽車がやつと待ちに待った故郷の山や川を望見するとこまで迫つた、いまもうすぐに幾年振りかで親や知己に会える。下五で待ち兼ねた感じが、よく出てゐる。第五句、故郷を後にする、豈啄木のみならんや、故郷を後にする多くの人は均しに啄木と同じところだ、多くの夢を達して故郷を後にしたのであるが、第六句、いくら物価値上反対を叫んでも、独占事業の強みは、独立採算制とかで、庶民の個々の事情など構ひなしにどんどん値上りだ、帰省も楽に出来ぬ、そこに汽車が早く走るのに、故郷が遠くなる理由が生ずることになる。

嘘少し混じえ故郷を美しく
紫
旧姓で声かけられる故郷の道
同

故郷が斯くなつかしい下宿の身

徹也

子を抱いて捨てた故郷の駅へ降り

瑞枝

なつかしい故郷で暇をもてあまし

同

引揚船故郷が見えてみんな泣き

花子

トンネルを出れば故郷の灯が見える

同

第一句、お国自慢に嘘を交せて少々美化し

た、純情な善意の嘘は許されていいものの一

つか。第二句、結婚して帰郷した娘が旧友か

ら元の姓で呼び下宿生活する為、故郷を思

うところしきり、寒夜にひとり勉強する身に

眼合せば、父母兄弟の温かい顔が浮ぶ、中七

が印象的、第四句、一度は捨てた故郷でも都

会で裏切られ、うらぶれの身に併かも子供ま

で抱いて戻ってきた、涙に滲む眼に故郷の山

河は何事もなかったように温かく迎えてくれ

た。第五句、あれほど懐しかった故郷でも暫

らくいると、その平穩無事に退屈して、都会

の喧騒が恋しくなる、もはやこの人の心は、

故国に安住出来ないほど都会人になり切っ

てゐる。座五で生きた。第六句、こと志と違

つた引揚船である。故郷が見えてほつとして

皆んな泣いた、失意と安堵が交つた涙か。第

七句、トンネルの暗さから明るい外へ出た途

端に、そこに故郷の灯が見える。幾年振り

に見た灯だろう、嬉しさと懐しきとで、心は

とうに、肉身の居る囲炉裡端で語り合つてい

る。

文化とは言え故郷はダムの底

ふるさとのおもかげ新幹線が変え

遊説の故郷にもある右派と左派

新婚をのせて故郷が近くなり

文化と言え故郷はダムの底

ふるさとのおもかげ新幹線が変え

遊説の故郷にもある右派と左派

新婚をのせて故郷が近くなり

冬眠が出来るものならし度いもの

けちくさい緊縮年賀状減らし

安堵した気持で枯葉舞い落ちる

安堵した気持で枯葉舞い落ちる

名案もなく老人うろろする

名案もなく老人うろろする

思案のあまり外出と決める

思案のあまり外出と決める

内職のかたわらですやすや眠むる

内職のかたわらですやすや眠むる

大阪市 橋本緑雨

大阪市 橋本緑雨

須坂市 高峰柳児

須坂市 高峰柳児

今更の落日あわてぬ背の丸味

今更の落日あわてぬ背の丸味

家宝売るわびしきせて値に折れる

家宝売るわびしきせて値に折れる

着ぶくれて闘病みじめに咳き続け

着ぶくれて闘病みじめに咳き続け

今治市 長野文庫

今治市 長野文庫

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

和歌山市 秋月宏方

文化と言え故郷はダムの底

ふるさとのおもかげ新幹線が変え

遊説の故郷にもある右派と左派

新婚をのせて故郷が近くなり

文化と言え故郷はダムの底

ふるさとのおもかげ新幹線が変え

遊説の故郷にもある右派と左派

新婚をのせて故郷が近くなり

文化と言え故郷はダムの底

ふるさとのおもかげ新幹線が変え

遊説の故郷にもある右派と左派

新婚をのせて故郷が近くなり

文化と言え故郷はダムの底

ふるさとのおもかげ新幹線が変え

遊説の故郷にもある右派と左派

新婚をのせて故郷が近くなり

東雲楼

秋月

同

文平

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

出身地が同じで親しき増してくる

同

住みついて故郷の墓も持つて来る

初甫

第一句、文化の犠牲になつてダムの底に沈

んだ故郷の村、割り切れぬ淋しさに父祖の霊

も浮はれぬことである、そうした上に積み

重ね築かれた文化で文明ではある。第二

句、新幹線が突つ走っている故郷、そのお

かげで美しかった故郷もさんざんに変えられ

た、乗客の人々は知らないが故郷は泣いて

いる。第三句、時局柄で選挙の遊説である。

故郷と言つても一様でない、そこには大きく

分けて右派と左派がある。それが世の中の面

白さでもあり複雑さでもある。第四句、新

婚の二人へ故郷が近くなつただけでは句意は

浅い、もう少し突込みの利いた具象がほしい。

第五句、入社してから同郷と判つて急に親し

さを増す、これが上役なら出世のコースにも

縛りがある、異性ならはほは笑ましい情景

にならんと限らないだろう。第六句、都会

人になつてしまつて今更墳墓の地でもあるま

いと故郷の墓まで持つて来る割り切つた考え

がよく利いている。

ふるさとは見つめるだけでよいところ

ふるさとは見つめるだけでよいところ

捨てさせた村から寄附を願ふ

千夏

故郷の言葉になつて夜は更ける

同

故郷へ見栄とは別な氣をくばり

同

故郷の味わけ合つてゐる夜

同

出稼きの夢は故郷をかけめぐり

同

第一句、ふるさとは遠くにあって想うもの

この名言の亜流であるとは決して云わないが

中七で捨て難い味を見させている。第二句、捨てさせた原因は何かは判らんが、冷たかった故郷の村から、何うやら今日の地位になれば、今までのことを忘れたように寄附を言うて来る、現代の為政者の心理を巧みに擷んでパンチの利いたいい句になった。第三句、佳句、見栄とは別なとは言い得て妙、複雑な心境をこの短かい語句で表現した作句者の絶えない努力を讃えたい。第四句、仲のよい寮生の睦い夜の情景がよく画かれている、これも中七の扱い方がいい。第五句、この正直な出稼ぎが温かい懷ろで帰郷する時が待たれる、この句の生命は座五にある。

ふるさとのたよりに柿の色があり みやこ
ふるさとのホームが霧に小さく消え 同

一着を故郷へ知らすランニング 破天

故郷から許すたよりへ早や三ツ月 同

第一句、ふるさとの便りに今年の家の柿の色つき具合を知せて来た、ただそれだけのことが、故郷を離れている者にとって嬉しいのである。第二句、故郷の駅を離れて行く朝、折からの霧にホームが消されるように小さく小さく、その時の淋しさがよく出ていて心引かれる。第三句、一着の吉報を、ランニングの儘、故郷へ知らす嬉しさ、あたりの速い場面もよく窺える。第四句、若い二人の自由な考え方と、故郷の親達の古い思想の断層から、やっと救われて、許す便りの来る頃には、早や妻君は三カ月の身重、悲劇が喜劇に変わるところ先ずは目出たし、この句のいのちは早やの語感。

次に左記の句は私なりに少し筆を入れた、御手許の原句と照合して参考にして見て下さい、句意をはっきりすが為めに多少皆様の目的に違ったことがあるかも知れないが、これも勉強の一方法として考えて見て下さい。

故郷の友へ切めても年賀状 松風

歌まつり故郷が出来る手を叩き 同

母の待つ故郷へつづく青い空 比呂路

出稼ぎのやっぱり故郷のみかん買う すき

新幹線のおかげ故郷近くみる 亜也

故郷をマンションに住み慣れる 水郷

故郷は密柑景気のつづく山 湖平

故郷の母の名寢床でそっと呼ぶ 多幸

資本家の手で削られる故郷の山 同

なつかしいふるさと見知らぬ人ばかり 初甫

法網疎にして故郷の母に逢い 同

墓地公園故郷の墓を移したい アマゾン

故郷の景色の中のダンブカー 同

スピード化故郷の近く通り抜け 千梢

就職の子に故郷のみかん着き 弘生

故郷の便りたどたどしいが懐しい 百酒

俤せは帰る故郷に親が待ち 同

ふるさとの便りに花の咲く夜更け 竜泉

今月はやや訂正した句を多くして全体の句数を増やして見た、その方が、皆様の楽しみに副うように思われたからだ。全体として云えることは、もっと推敲すること、例えば上五と下五を入れ換えて見るとか、他にもっとすっきりした語句、ピッタリした動かぬ語句

すばらしい
着心地

蝶 久
シャツ



を探り出すとか、句が出来てから、時間的な余裕を持って見直すとか、そして動かぬ一句に仕立て直すこと、訳の判らぬ十句より、はっきりした一句を得ることに努力すべきではないでしょうか、そうした努力が必ず人を引きつける力になるのではないのでしょうか、次の健吟を期待しましょう。

出世して戻る故郷へそれっきり
故郷の方へ乾盃差し上げる 選者吟 同

三月二十日締切 五月号発表

題 「花だより」

宛 先 大阪市阿倍野区王子町四丁目

二番二十二号

菊沢小松園

真鍋一瓢君逝く

若 柳 潮 花

昨年十一月一日、胃ガンの為に一瓢君が亡くなられたと云う知らせを三夫氏より受けた時、私に取って、ショックと云うよりも、むしろ淋しさが全身を流れるのを覚え、一瓢が死んだと復唱していた。

一昨年日立造船桜島工場を役付工として定年退職をしたと聞いていたが、特に誰よりも退職と言うことを気にされているだけに心配もしていたが、ある日村山光輪氏より、下請工場から日立に来て居られる一瓢さんに逢いましたと聞いた矢先であり落着けば作句もするだろうと思っていただけに彼の死は淋しいものだった。

彼は終戦後、私と同じジョップに勤務していた関係上、時折り川柳に就いて話し合ったのが、きっかけで作句されるようになり、川柳に入会されてから、彼流の作句に対する才能を見せはじめ不朽洞会員となつてからは編集部に籍を置き、当時社の企画であつた句評リレーと云う、やっかいな仕事を自分の仕事のように引受けていた。彼の性格は派手なものではなく地味な方であつた。それだけに集

つても言葉で人を笑わせるようなことはなく、自分でも腹の底から声を出して笑うことも少なかったと言ふより無かつたが、彼の句には軽いユーモアがあつた。それが彼に敵を作らせなかつたし、一面孤独なものを持つ彼は交際範囲も少く、有るとすれば社の同輩、部下位いでそれも深い付き合いはしていなかつた。このような彼から川柳を失わせてしまつたらどうなるだろうかと思つたことがあつた。

川柳を透して良く語り合つたが彼のプライベートに関する事は聞かなかつたし、彼も又家庭に対するものは口にしなかつた。ただ彼の句の匂いの中から、句を透して知る以外はないだろう。彼が路郎門下の秀才であつたことも、彼の句に生命があつたことも、彼が生活と取り組んでいた結果だろうと思ふ。この彼が定年退職を控えて、ブツツリと作句をしなくなつてしまつた。それは人一倍定退を気にしていた彼の定退恐怖病のようなものが彼から作句する心の余裕を奪つてしまつたものだろうと考えるが、もし彼にして作句を続けていたとしたら、この苦痛から逃れ出て、死期も早めはしなかつたらどうと思ふのは、私のみではないだろう。

また死期を早めた理由の一つとして言えることは、役付工として永年、重労働をして居なかつた彼が下請工としての日常の勤めは彼にとつて重労働であつたに違ひない、しかし今はそうした生活へのすべての汚れを流し、後輩へより良き作品を残し、何も思ひ思つこ

とのない黄泉路へまっすぐに、好きだつた川柳を思い切り作ることの出来る路郎先生の許へ歩きつづけていることだろう。

一瓢さんさようなら。

妻や子へ残る思いを抱いたまま

潮花

一瓢句抄

寝る為の酒よ子の眼よ妻の眼よ
今日の餌ももろたぞタイムレコードよ
五十五の満期ペン先変えるよに
月賦月賦ビールが喉にひっかかり
ハズ帰るあわれ変形した靴で
落ちついて病んでも居れぬ借があり
そのけそこのけ野心の塊がゆく
夢うつつの仲の二人へ生れた子
シグナルは青だそれ行け子沢山
月だけが大きく夜の一心寺

川柳三十石二十周年記念川柳大会

日時 三月五日午前十時

会場 守口市民会館三階（市電守口終点北

へ三丁西側）

兼題「一番」不二也選「月」吾水選「傘」

三碧選「北」いさむ選「どんぐり」不折選

「塔」白柳選「折鶴」萬葉選「若鮎」弘口

選「若草」村雲選「女性」光女選「お水取

り」一麦選「むらさき」茶人選「大和」成

光選「梅田」郁三選「文学」塊人選「城」

喜正選「京都」紅寿選「ひまわり草」太路

選「船場」宣介選「三十石」紅樹選

各題二句、締切り午後一時。

柳話 本田溪花坊、菊田太郎。会費 三百

円（昼食費ほか）主催 守口市祝町四十五

（黒田紅樹方）川柳三十石電話 四二〇六

ストーブ

宮口笛生選

ストーブが真ッ赤捜査はかどらず
 ストーブも買わせ受験子よく眠り
 あそはせる雪へストーブ燃えつゝ
 ストーブを囲んで今日の空模様
 ストーブを買って冬の姿勢よし
 出火時の真相ストーブだけが知り
 お見合の部屋ストーブ弱くする
 不景気も知らずストーブ赤く燃え
 ストーブへ坊やもおいでと輪
 ストーブの火を確かめて退社する
 ストーブの温度手頃に睡魔来る
 ストーブのない時風邪もひかな
 ストーブへシヨートスカートの膝揃え
 ストーブ燃えろ深夜業は急ピッチ
 ストーブが母の外出にぶらせる
 ストーブの話題仕入れる週刊紙
 ストーブへ話預けて夜業すみ
 ストーブの方へ上役追いやられ

ストーブの前で決ったいい話 藤波
 ストーブの温みに遠く母は縫い 光郎
 ストーブを囲んだ輪にもある序列 保夫
 ストーブの部屋で吾家のデスカッション 夢
 後入りがまたストーブをがちゅる 春巳
 風糸が切れストーブへ帰って来 不水
 ストーブへパット燃え切る淡い恋 征也
 ストーブへ夜警の餅が焼ける除夜 芳仙
 待合所のストーブ申し訳に燃え 可住
 ストーブを抱くよう夜警から戻り 愛鳩
 雪山讃歌ストーブ囲む山の宿 正朗
 ストーブを挟んで探す妥協点 千翁
 ストーブの議論は大臣呼び捨てる 恵二朗
 税務署のストーブだけは温くも 木魚

佳
 ストーブで宿直なにやら炊き始め 水郷
 赤ちゃんへストーブ武装して置 みや子
 ストーブへ遠く男の眼がすずし 水客
 ストーブが消えて冷え行く虚しさ 痴亭
 山男の唄へストーブ燃えさかり 七面山

人
 ストーブにすねた娘が一人欠け 信二
 地
 ストーブへ寄る一くぎりした仕事 晃男
 天

婚 約

松川杜的選

ストーブへ噂の人が来て黙り 素身郎
 ストーブの話へ合す仲間入り 軸

婚約の日からテレビの料理見る 句楽坊
 婚約を急がしてからを疑われ 文子
 公認となつてデートの数が減り 瑞枝
 婚約はもう大っぱらに誘いに来 無聖
 婚約をしたことにしてさはいとく 百酒
 婚約の証人トンボが飛んでいた 古方
 君払つてと婚約後のデート 章雅
 ミシン屋がもう婚約をかきあてる 花子
 チャッカリとロマンスグレーと婚約し 痴亭
 婚約へ母の昔を聞かされる 晃男
 仲人へ親があやまる娘の決意 芳仙
 婚約は百姓ささぬ念を押し 可住
 婚約の二人家賃のことに触れ 光郎
 婚約と離婚が並ぶ週刊紙 初甫
 婚約へ親は嬉しく見捨てられ 千翁

三人の易者に聞いて縁を決め
条件はあと見る話で妥協する
弘朗 十九平

婚姻は婚姻フレンド別に要り
不水

婚姻は母に任せて山登り
明朗

マスコミを尻目にスター婚姻し
清泉

腕時計交換して婚姻中
静水

婚姻の噂ふりむいてもくれず
齊花

婚姻を馬耳東風のスラックス
礎山

気の早い親が決めて婚姻者
昭好

婚姻へ子供は二人までと決め
素身郎

婚姻に云うた酒量があとを引き
どんたく

婚姻のあい手世間が聞きたがり
孝華

婚姻ができて仏間の灯が明い
恵二朗

婚姻のふたりへ菊花展が晴れ
旭峰

すうどんに意見の合った婚姻者
いさ夢

婚姻がきまりアルバム整理する
東雲楼

婚姻へまだ迷信がつきまとい
芳子

婚姻へもうはばからぬ腕を組み
正朗

婚姻解消わが子の勇氣はめてやる
水客

五 客

婚姻者らしいが割かんして別れ
酔夢

家がないまま婚姻まだつづき
明子

婚姻へ隣も娘がかえとり
幽谷

婚姻へもの足りぬほど固いひと
愛鳩

婚姻発表未だ生きていた丙午
紫

人

エンゲイジリング屋台の灯にも立ち
水客

地

婚姻も決ったらしい年賀状
秀峰

天

婚姻へも大安の日を選び
七面山

豆

河村日満選

豆まけて喰った話を予は笑い
不二

小豆飯そうか子供の誕生日
静水

ふるえつつ呼び出しを待つ豆力士
野迷路

豆むきを手伝い乍ら子はねだり
瑞枝

まだ豆もただけますの古稀祝う
木魚

豆つぶの母へ手を振る展望台
花子

亡母のした通りに立春の豆を煎り
千代

豆鉄砲に慣れてて鳩は驚かず
十九平

炒豆の手が忙しい割烹着
代仕男

豆選手スタートまでは母が添い
光郎

豆てはん戦後の頃を思い出し
雄声

箸先で煮豆が逃げてるほどに酔い
幽谷

しわ寄せて煮る黒豆にコツが要り
佳女

豆を噛む音へ若さをうらやみぬ
どんたく

豆播きに動員された名スター
七面山

豆を食え豆腐を食えと栄養士
東雲楼

豆ほどの眼いばが邪魔をする見合
すき

先生の自炊へ煮豆届けさせ
勝子

節分の豆倅せな音でいれ
奇童

人並に豆を撒いたに福が来ず
藤波

野営地へもう一と息の足の裏
章雅

理科の豆ガラスの瓶の中で伸び
愛鳩

手に豆が出来て犬小屋やつと建て
恵二朗

恋人に豆を食われているビール
芳仙

手の豆を潰して日曜大工すみ
秋月

佳

豆を煮るコツも伝えて良い姑
紫

最後まで選り選り食うたはじき豆
幽谷

豆買え鳩集団で向きをかえ
宗太郎

豆記者の質問大人をまごつかせ
舞子

水吸うた豆は四十の肌に似て
可住

人

遠い遠い思い出豆の葉をならす
愛鳩

地

ママの口裏紅に画いた豆画伯
恵二朗

天

豆の笑ひとりはじけて農家留守
齊花

大萬川柳のベスト・10決定

第百八十九回 (新年度最終回)

大萬川柳

「早熟」

入選発表

選者 清水白柳

投句総数 七百十二句

入選 五十句

裸婦の額かけて宿題はかどらず

高槻 静馬
聞いたふうなおませ云う児にうたふ

大阪 滋雀
投げキッス返しオシッコまだ言々
ままことの堂に這入った敷つぶり

大阪 凡九郎
大人の邪心がおませな意味に聞く
早熟やおへんそんな時世どす

豊中 古方
天才の案外ませていたらしい
あたりまえのこつちや早熟うあらず

富田 美房
パパとママ恋愛なのよおままごと
補導する婦警の方が頼くなり

岸和田 きさ子
早熟な作文へ母呼び出され
マスコミへその早熟が利用され

大阪 小松園
ねんねこの中でおしやまな口を利
ませててもまだ色恋の線でなし

美弥 弘道
子沢山末っ子ませた口を利き
花街に生れおませな子に育ち

五客
早熟な子を保母さんはもてあまし

玉島 千翁

もう熟れた柿を鳥は知っていた

岡山 藤波

早熟が通り相場の現代っ子

大阪 保夫

早熟の子に説明が出来ぬママ

富田 東雲楼

早熟の子に片親の気が疲れ

大阪 阿茶

早熟は要所要所の釘が抜け

布 施 清人

息子の鈍娘のおませにも困り

石川 宗太郎

じれったい性の授業へズバリ問い

和歌山 木魚

早熟は俺れに似たとも子に言えず

大阪 柳志

尼崎 利美

家庭ではねんね会社ではおませ

米子 花子

早熟な子が女教師を頼くさせ

加賀 一路

十六の想い出にある手のぬくさ

大阪 集一

早よ嫁にやれとおませな娘を案じ

下関 不水

ませた娘に振りまわされる男の子

岡山 文平

早熟の子に新婚がからかわれ

泉大津 徹也

のど自慢子供の歌が忘れられ

明石 齊花

教育ママ性教育に切りかえる

大阪 弓彦

先生の恋を生徒がもうキャッチ

大阪 柳志

大阪 弓彦

後列の方からちらほら声がわり

堺 一舟

早熟にさせたは部屋のない悩み

神戸 どんたく

太陽が早熟にしたフラダンス

大阪 梅里

なにかも知っている子で手に負

花街の娘といわれたくない躰け

人ノ句

岸和田 きさ子

貧しさへ長女としての早い知恵

地ノ句

児島 恵二朗

早熟にならざるを得ず母が亡し

天ノ句

明石 齊花

早熟の子が一人居るかくれんぼ

選者吟

天真爛漫を早熟と見られ

大萬川柳四十一年度

ベストテン決定ノ

(自四〇、九ノ至四一、一二)

一 松江 梅里 四一、五大阪

二 正本 水客 三七、五大阪

三 吉岡 美房 三五、五 富田林

四 内藤きさ子 三五、〇 岸和田

五 本多 柳志 三三、〇 大阪

六 笠原 吸江 二八、五 南河内

七 川村 好郎 二六、五 高石

八 傍島 静馬 二四、五 高槻

九 金井 文秋 二四、〇 大阪

一〇 山川 阿茶 二三、五 大阪

一一 遠山 可住 二三、五 藤山

一二 本田恵二朗 二三、五 見島

一三 本多 清人 二三、〇 布施

一四 関戸宗太郎 二二、五 石川

一五 菊沢小松園 二二、五 大阪

一六 北川 春果 二二、〇 大阪

一七 市場没食子 二〇、五 大阪

一八 城 一舟 二〇、五 堺

一九 岸本 木魚 一九、〇 和歌山

二〇 和田 痴亭 一九、〇 大阪

以下略

昭和四十二年度第二回

兼題「代理」五句以内

締切 二月二十五日

発表 三月二十日

第三回予告

兼題「庇(ひさし)」五句以内

締切 三月二十五日

発表 四月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町

三ノ一〇

大萬川柳会

大萬川柳十五周年記念大会

日時 昭和四十二年二月十二日(日) 正午始

会場 大阪市阿倍野区松崎町 大萬 電・

司會 費 百五十円(大会句集費を含む)五〇三一—二

開會の辞 西尾 菜

祝の辞 若本多久志

挨拶 中島生々庵

表彰 松江 梅里

昭和四十一年度ベストテン及び三賞表彰

新年度第一回 (吸江、可住、一舟)

兼題「長靴」入選発表 清水白柳選

兼題「奇蹟」 松江梅里選

兼題「苦勞人」 吉岡美房選

兼題「女連」 内藤きさ子選

兼題「長生」 本多柳志選

兼題「選者」 笠原吸江 川村好郎 傍島静馬

兼題「兼、席題五句以内」 金井文秋 山川阿茶(敬称略)

注、大会当日の出席者も二月七日着便で投句して下さい、但し投句のみの方は百円封入(句集代を含む)して下さい。

選者の方で当日出席不可能の方はその旨予めご通知下さい。

閉會の辞 菊沢小松園

ベストテンご招待懇親宴 午後八時閉宴

主催 大萬川柳会

後援 川柳塔社

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼山路関古著「古川柳」が昨年の出版書籍一般の部のベストテンに入ったと毎日新聞紙上に発表されていたが、川柳界として喜ばしいことであった。

▼大森風来子氏(岡山市)は「ますかつと」十二月号で「同人癡止私論」を執筆された。同人と一般会員との発言力、作品発表などの

ハンデイが、川柳誌ひいては川柳界の民主化をはばんでいる事実を指摘されて、真の柳誌の発展は、今の柳界には通用しないだろうが、同人癡止の時機が訪れなければならぬし、その方向へ努力すべきだという論旨である。

▼第五回東北北海道川柳大会は昭和四十二年一月二十二日(日)午後一時から北見市北三条東一丁目北見会館で開催された。

柳社と改称、発行誌を「らんせん」と改題して足登する本郷町六丁目井川紋弥方へ移転した。

▼菅生沼編「酒の句集」が昭和四十二年十二月一日広島県加茂郡西条町、加茂川柳社から発行になった。広島川柳会々々長石原伯峯氏の序に、「酒ととり」とりて大空のころかも」かれ、これ三十年ほど前になるが、故麻生路郎氏のこの一句に感動し、これが動機となった川柳の門を叩くことになった。中略、路酒「山陽」の祝盃を手にして、ゆっくり酒の句集を読める日を夢見ながら云々」とある。

▼「わが墓碑に無名の酒徒と刻むべし」「盃が小さかろうと言うてくれ」など佳句も多く、左党のみならず興味ある句集となった。

▼川上三太郎紫綬褒章受章

並壽祝賀会は、昭和四十二年三月十九日(日)午後一時から東京都文京区湯島一丁目七の五湯島会館で開催。兼題「紫」「川柳」各題三句、投句は三月五日までに東京都台東区下谷二丁目二十の九川柳研究社宛。

▼川上三太郎氏(東京都)村田周魚氏(東京都)は十一月三日の京浜川柳大会席上、川柳功労賞を受賞された。

▼大阪保険新聞から「新春から「川柳講座」と題して斯界の權威である府医会員中島生々庵氏に執筆をお願いすることになりました。氏は昭和二十二年大阪府文化賞を麻生路郎、岸本水府両氏とともに受賞され「川柳塔」主幹兼理事長を主宰されています。本職は南区医師会長であり、大阪府内科小児科医会副会長を兼ねておられます。

▼中島生々庵主幹は大阪保険新聞へ一月十一日号から毎週「川柳講座」を執筆され、川柳普及にとめられている。

▼若本多久志氏(西宮市)や栗、好郎、梅里、静馬、圭井堂諸氏が十二月十八日の冬にはめずらしい小春日

和の一日を北陸路の旅へ出立。山代温泉に一泊、安宅の関や実盛首洗いの池を回り那谷寺に参詣された。清遊を神みそなわし日本晴れ。多久志。

▼川柳塔社の理事長以下在阪参事、常任理事諸氏が一月十八日六時から大成閣で新春懇親宴を催された。

▼池田可首氏(長崎県)は今年も「趣味の手描ののれん展(長崎県主催物産展)」を一月十七日、二十一日(東京三越本店)二月三日(三月七日、十二月二日)大阪高島屋百貨店)で催される。

▼田垣万大氏(倉敷市)昨年十月三十一日で三菱重工を退職され、現在は協力工場水島工業KKで常務取締役をされている。

▼友淵貴山氏(高石市)市制変更一高石市高師浜一丁目二十二、二十二。

▼備前川柳社(岡山市)吉永町内七カ所の国鉄踏切に踏切事故防止川柳の標柱を建てたことに対し岡山鉄道管理局局長から感謝状が贈られ久米雄、一声両氏が代表として出席された。なお四月二十三日(日)には備前川柳社創立通算二十周年になる。

はげぬ・かぶれぬ白髪染

容 理 え ま 男

一丁南駅裏田町寺環状線

るので吉永町文化川柳大会を開催。詳細は後日発表。

▼藤本礎山氏(鳥取市)から伝統ある朱竹画を生々庵主幹、白柳、一三夫、葉子諸氏に送ってくださった。縁起のよいこの朱竹画を本社にもかけさせていただいた。

▼八木摩太郎氏(堺市)と西村佐久良氏へ堺市成人講座の講師への謝恩としてO座有志から銀製花瓶が贈られ、本年も成人講座へ川柳を入れその普及に努力される由。

新同人紹介

岡

崎 祥 月

縁之助、生々庵推薦

▼川岡雪眼子氏(諫早市)は諫早市川柳文化会新春大会を諫早天満公民館で催されるが選者として出席される。長崎新聞新春文芸川柳部門に前田峰泉、大我辰太両氏が特選になった。

▼ふじかけ短詩連会本年の優勝者藤本征也氏だった。

▼井上旭峰氏(玉島市)は食道の疾患で岡山大学付属病院田中外科へ入院されたが経過は良好とのこと。

▼池田古心氏(岡山県)一ヶ月の寄せ書きをいたした倍加運動に数名の柳人をふやしてくださった。

▼平沢保美氏(大阪市)は一昨年十二月脳溢血に倒れ日高病院に入院加療、現在では字も書けるようになり四五月頃に退院の予定である。

▼平岩司郎氏(京都市)は昭和四十一年十二月二十日午前三時、過労心痛による蜘蛛網膜下出血で死去された。行年五十七才。氏は川柳雑誌の古くからの同人で京都支部で令兄田中鳥雀氏とともに活躍しておられたが、路郎先生の死後は、川柳の筆を持たれなくなった。氏は中学からの同志社の生え抜きで、同志社大学の文学部事務長をしておられた大ラグビー部の育て役だった。哀悼。

▼長宗白鬼句集「雑草」が東京都文京区目白台一丁目八番三号(振替東京八一九九番)法学書院から発行された。番衆の同人として三十六年間のキャリアを二千五百句に纏めたもの。限定版、上製箱入、価七百元送料七十円。

▼一九六六年度柳都賞受賞作家は、同人の部に佐藤加津郎、鈴木宏の両氏、会員の部に名古屋一水氏と決定発表された。

▼正本水客氏(大阪市)か

ら、「色々ご心配をおかけした類焼の家も、旧臘十七日三日月振りに完成、皆様のお蔭で落着いた正月が迎えられることと喜んでおります」

▼服部十九年氏(岡山市)は、川柳塔の参事就任を祝して、新同人、水粉千翁、井上旭峯両氏の所属する川柳たまし社から、祝吟の寄せ書を掛軸に表装して贈呈された。また十二月の三日から上京、年末恒例の遺族運動に奔走して二十九日まで一行七十名を指揮された。

▼伊藤茶仏氏(小松市)から、「母死去に際し、皆様の寄書をいただきありがとうございます。」「九十五のまま極楽に母が往き」

▼河村日満氏(鳥取市)は十一月二十日、鳥取市会議員に当選。(二回)

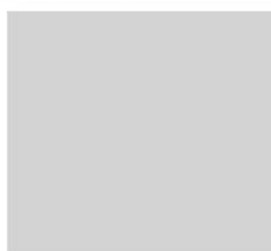
▼森田若人氏(鳥取市)から、「十二月四日鳥取川柳会忘年会を兼ね同氏著『うみなり』出版祝賀会を鳥取市いなば荘で開催。八歩・日満・湖山・法泉子・多可志・三歩・新雪・吾柳の諸氏をはじめ二十五名の参加で盛大であった」

▼谷垣史好氏(松原市)は

十二月中旬羽曳野病院から退院された。住居は松原市堀町一六一。

▼木村章子さん(旧姓今井)は十二月二十四日木村猛雄氏と結婚された。お慶び申し上げます。

▼河相すゑ氏(西宮市)は一月元日から三日間、番傘の松本波郎氏夫妻、ふうすとの増井不二也氏夫妻、海士天樹氏らと恒例のおめでとう会を蓬萊社の観光ホテルで持たれ、四日帰途、有馬の大山竹二夫人、近江砂人氏芦屋の新居などを賑々しく訪問された。



▼橘高薫風は一月一日、家族六人連れて箱根強羅へ遊び、三日夜帰阪した。「元日を富士の麓で今年こそ」

▼杉本辰一氏(箕面市、旧不朽洞会員)は一月二十二

日に催された全日本標準選手権大会に見事優勝された▼川柳塔社在阪役員新春懇親宴(既報)出席者は清水白柳、河相すゑ、北川春志、松江梅里、川村好郎、西尾栄、大坂形水、西田柳宏子、橘高薫風、菊沢小松不二田一三夫諸氏。ますます結果をかためた社の繁栄を誓い合った。梅志氏の謡曲「高砂」でめでたく九時閉宴した。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

アリナミンA

本社新春句会

会場 自安寺
八日 午後一時

川柳塔になってから二度目の新春句会である。出席者は六十名をすこし越していたのだが、活気にあふれていることはウチの特長となったようである。

生々庵主幹が柳話をされるころから会場はいよいよ熱気をはらんだ。 (柳話は58P参照)

まず41年度全出席者へ表彰状と主幹の短冊が授与される。14年間連続全出席の傍島静馬氏をはじめ、松江梅里、清水白柳、松下たつみ、宮地双葉、戸田古方、浅川八郎、金井文秋、辻白溪子、本多清人、本庄金三、山田季賛、大坂形水、笠原吸江、天正千梢、不二田一三夫、中島生々庵の17氏。

生々庵主幹が梅里副理事長から表彰状を授与されると、期せずして満場から拍手が起るという一コマもあった。

中央のテーブルにきょうの月間賞のカップがサン然と輝き、席題「急所」から「雪花月戦」を織りまぜ、いよいよ42年度のカップ争奪の火ぶたが切っておとされた。

兼、席題の天位七句を主幹が再選して月間賞がきまるのだが、年間同点者があった場合

は「川雑」時代のように、天位の獲得数や出席率がそのきめ手になる公算があるので、一題たりともおろそかにできない。

雪月花戦は雪組が断然強く、スタートからゴールインするまでトップという独走ぶりだった。

新春句会の月間賞は羽原静歩氏の秀句にかがやいた。一三夫氏が天位に二句わりこんだが惜敗した。

きょうの賞品に、藤村メ女、大坂形水、小川恒明、西尾菜、菊沢小松園、若本多志諸氏がたくさん寄贈されたので、一三夫氏にトラクを呼ぼうか、と祝いのことが出たほどである。

短冊交換会もなごやかに、午後六時めでたくな新春句会の幕がおりた。(河井庸佑整理)

出席 与呂志・たつみ・白溪子・葛城・柳宏子・葉・きさ子・操子・双葉・加仙・三司・痴亭・旅風・白柳・章雅・一舟・言也・生々庵・小石・照一・あいき・文秋・瓢太・珠笑・多蘭子・太路・好郎・吸江・富久一・トメ子・梅里・没食子・形水・孝夫・いさむ・庸佑・孚彦・一三夫・潮花・美房・金三・凡九郎・遊迷路・小松園・古方・六竜子・芙巳代・舟遊・奈良子・静歩・千梢・水京・万の・柳志・弓彦・静馬・季賛・雄峯・薫風・すむ・恒明・葉子

席題「急所」

丹波太路選

大怪我の幸運急所それでした 章雅

急所をば衝けば同じく又衝かれムコにする弟子へ急所をまず教え描き眉毛毛の急所衝いてく急所には触れず新春座談会急所突いたが大物過ぎた揉み消うなぎやの急所を掴む手の早さ母さんの小言急所へ遠まわし急所はずしてやんわりせめて来るセールのかんが急所をはずさ急所責める鍼にかまかせて眼をつり急所をば突かれ社長が立往生飲んでは語す急所を子は覚え急所を握つてゐるらしい女秘書調べ室急所をつけば朝鮮語金儲けの急所教える本が売れ急所だけ握り社長の自由主義記者すばりすばり急所を衝いて泣きどころおさえて税吏煙むがイタイとこ握られ指輪ねだられるお仕立は急所外さぬ荒仕立パパの急所知つてゐるらママの顔脱税の急所つかれて低姿勢答弁はうまく急所を外している笑顔穏やかに急所を衝いている笑顔何気ない子の一言が胸を刺し社長さんの急所をそと教えられ言いたいこと言えぬ急所をつまみ野党から急所つかれた黒い霧黙否権急所へくると横を向きそととして急所へ触れぬ思いやり煙に巻くつもり急所を突つ放し

孝夫 白柳 六竜子 珠笑 梅里 瓢太 痴亭 小石 凡九郎 双葉 古方 吸江 水京 柳志 白溪子 好郎 言也 芙巳代 一三夫 きさ子 水京 双葉 静馬 旅風 静馬 小石 梅里 葛城 一三夫 太路

— 56 —

正体は言わずゲテモノ食われる
正体がばれ栄職を皆剥がれ
正体のないを車掌もてあまし
正体あばけず警察たじたじし
蝶になるまでの毛虫は嫌がられ
酔いつぶれ駅のベンチで夜を明
正体がわかって恐くないお人
女女の正体しりたがり
正体をあばきそこねて居直られ
正体を崩し自前で酔うマダム
正体を見せまいとしてボロを出し
朝見れば夕べのお化はただの岩
正体はきかずに置こうスラム街
正体はどうあるうとも君と僕
正体が判りそれから冷とうなり
はからずも正体見せた酒の量

雅号ぶっちゃけばなし

れいがんし



・川岡 霊眼子・

かわおか

柳安子 言也 雄峯 千梢 小松園 瓢太 小石 潮花 富久一 白柳 孚彦 操子 季賛 小石 太

正体の無いのが背負わす来た露地
正体をあばいて推理幕になる
正体を謎につつてマダム老け
正体の知れぬ電話が脅迫し
正体にふれず気楽な釜が崎
正体も知らず串かついい機嫌
登山道何の祠か注連を張り
正体をつかめば唯の人であり
口止めをわが正体ムズムズし
檻の狸化ける気力もなく限り
なよなよと来て男湯の目を集め
金ほしいそれが言えずにごね回し
正体がばれそう低姿勢になり
正体を知ってる容疑者また消され
正体をあばく正義の筆が冴え

与呂志 舟遊 六竜子 トメ子 操子 好太郎 弓彦 野迷路 柳宏子 梅里 雄峯 一舟 いさむ 庸佑 柳志

(25)

昭和十三年、川維の神津支部を亡武部
香林と大阪の三津屋でつくり、最初川
柳には自信がありそうになかったので、時偶の入選
に川岡風情(ふせい)が、と笑われるのも面白かろ
うとつけた名が風情、その後、昭和十九年六月、九
州の故郷に疎開して宗教の管長になり霊眼視(靈感
の眼で視る仕事)に就いてから川柳の時のみ霊眼子
と「視」を「子」に変えて、新聞の選や信者に短冊
揮毫などの時用いるようになった。

過日も東京からNHKテレビの「私の秘密」に龍
の一筆書きに川柳を即書きする実演に出場して喜ば
れた。変哲な雅号で職業の宣伝の一役も買っている

「半生を雅号で暮す生れつき」

千里眼、五十八歳

骨までしゃぶってから正体を見せ
正体はミクロが発いた微生物
ガン究明もう正体へ遠からじ

兼題「羊」

松江梅里選

胎動へもう安心な羊年
還暦の羊が揃う同窓会
丙午明けて産湯の羊年
ゆるさためたの長さで羊生き
牛かとも見える羊の賀状来る
羊肉旨う喰わしたママの知恵
元旦へ柵から逃げる羊あり
キリストの周囲にふさわしい羊
羊から見ればオールウールの服
石を持つ子供へ山羊は目をむり
羊毛の明日は刈られる毛を育て
さなきだに女房に弱い羊とし
齢不惑まだ迷える羊なる
ビニールの紙で羊は胃をこわし
角かいてやっとなと判じられ
苦勞性の母も長女も羊どし
羊みな善玉ばかりの顔で群れ
イメージと違う羊の毛が刈られ
教え子の賀状羊の顔ならぶ
牛肉のピンチへまかり出るマトン
どれも皆角を巻いてる羊の絵
スタイルに何故そう凝るのかと羊
羊がやさしく見えるのは角のせい
羊年柵のペンキがまだ匂い
宣伝に羊が高い値で買われ
商魂は生れた羊で人を寄せ

芳朗 正郎 繁太郎 磯山 吸江 加仙 多蘭子 薰風 好笑 珠笑 柳志 静馬 好郎 没食子 小石 きさ子 生々庵 美房 奈良子 きさ子 柳宏子 富久一 白柳 いさむ 与呂志 瓢太

羊の顔飼いならされた僕に似る眼鏡でもかけてやりたい老羊も肉も皮も羊は愛される小羊に似てパトロンに飼育される羊毛のよさへ和服遠ざかる日本の羊戦禍をまだ知らず先頭の羊指揮官らしく行きシャッターを羊に向けた天王寺あわてて羊を見ないのが不思議レジスタンスあるが羊に力なくハズ今日も迷える羊か一時打つ

生々庵 多久志 操子 白溪子 弥生 静歩 照久志 小松園 孚彦 どんき

新春句会から

中島生々庵

本年で第二回目の新年を迎えるわけでございますが、実のところ昨年のお正月、いわば「川柳塔」社といたしましては路郎先生の喪に服していた形でありまして、発足第一回の新年とは申しながら、普通の正月気分とは違った、きびしいものを肌感じて新春を迎えたわけであります。

本年第二回の新しい歳を迎えますことを得まして、而もお蔭さしをもちまして月々に外観内容共に、たとえ僅かずつとは申しながら充実の一途をたどり大方皆様からも過分なご批評を賜ることがしばしばございますことは、皆様と共にこの上ないご同慶の至りに堪

何億を見越して羊飼育されぬくぬくと着て緬羊の春のどか実権は羊女房がにぎって羊の眼聖人らしく静かなり迷惑な顔の羊へ注連縄を張りふとらせてむしる羊は税に似て羊まで胎児持ち越す腹でい迷わずにこの道をゆく羊どし山羊の仔も殖えてのどかな開拓地逢引にマトンの匂い消して立ち一っぴきの犬に群羊リードされ

操子 どんき 弓彦 小石 小松園 一三夫 あいき 奈良子 六電子 白柳 静馬

えないところであります。それと同時に、よくぞ「川柳雑誌」廃刊に際して、間髪を入れざるタイミングで「川柳塔」が皆様のお力添えによって発刊出来たことは、今日から

顧みまして、一つには故路郎先生に対するご報恩の万分の一にでもなり得たのではないかとと思う心と、今一つは川維不朽洞会員並に川維愛読者一同の川柳生活の方向づけに対して、いさかかなりともお力添えが出来たのではないかと存じます。裏をかえして申し上げますならば、もしもですよ、一昨年九月川維廃刊を以って、そのまま跡かたもなく全く消え去ってしまった「川柳塔」が誕生していなかったとしたら、そして誕生したとしても一、二か月で発育不良のままこの世から姿を没して終ったとしたら、今日私達はどうなっていることでしょうか。考えただけで冷めたような風が腹の中をさっと吹き抜ける気持ちになります恐らく大部分の人は川柳のペンを折り、句箋

伸びては刈られあきらめ羊の眼海鳴りも知らず羊は草を食み政界の霧は羊を汚すまい一刀彫の羊児の掌へ巫女の齢ボスターの羊は春をたわむれる夕焼空へひとり羊の目は孤独羊頭狗頭候補の声はヤシに似る順逆を守る律義な羊年羊歳さっそくゲストに引き出されさまよえる小羊救った曾根崎署還暦へ丁度ひつじの当り歳

生々庵 静歩 三司 章雅 季贊 三司 葛城 白溪子 一三夫 梅里

を棄ててちりぢりに四散して行つて、今日このように一堂に会し、新春を寿ぎ合うことは出来なかったではなかったかと考えられます。

思いがここに至ります時、これまでいろいろ困難苦労もありまた将来への険しい道をも予想されるとはいえ、とりあえず「川柳塔」が誕生し、育つてくれてよかったあの感じが胸いっぱい迫ってこみ上げて参ります。このような意味から申しまして、これから是非万難を排して前向きな精進を努めて行くことはありませんか。一本の矢より二本の矢、二本の矢よりも三本の矢と申します。皆様の逞しい力の結集によって「川柳塔」を育ててゆくにはありませんか。私も老骨を引つぎて皆様の驥尾に附し、全能力を傾け一生懸命努力して参りますことを年頭に当り固くお誓い申上げる次第であります。

(柳話)



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

悪友にしたりされたりうまが合い
ママの眼に遊ばす友達少なすぎ
マジックでならと代筆してくれる
汚職又いつか立消えしてしま
叩き売り政治が悪いせいにする
北向きの店北風と勝負する
一ぱいのんだかマジックの線ま
本妻にせぬ分別は持つており
スト中止さつとマジックで書かれ
まだ不思議そうに見ている人違
ぜんそくにいやな北風強くなり
叩き売り後一声を待つて買い
分別がその据膳へ目をつむり
北風へ母の背中の丸い事
不思議だ不医者ばかりを直
倒産の戸が締つてる叩き売り
悪友になつてやりたい敷かれ振
子を送る母北風に立ちつくし
叩き売り底値知れずへ手をつか

梅里 花梢 柳宏子 清秋人 文秋 梅志 好江 吸江 一栄 双雀 滋彦 弓彦 十悟 古方 一舟 痴亭 金三

分別が付いても未練まだ残り
不況下も不思議な神の守護を受け
叩き売りサクラへ調子聞いてみる
家族連れ分別のある酒になり
北風に通天閣もひまなそう
不思議にもすりとうそが言ふ僕
悪友が旅費の工面もして通がし
分別な顔を眺めて恋は逃げ
北風の中で盆栽値切つとり
無分別らくがきした字が目にし
妻ま顔虫の報せを語り合
マジックにほんろうされた素晴
分別の深い男でよう肥えず

玉造川柳会 (大阪市)

西出一栄報

節穴へ好奇の心くすぐられ
金の事になると電話の声を下げ
貫一とお宮へ月は幕の蔭
過去った日を妻と話せる二十年
振り向けばついて来そうぞ去
二度と来ぬ科白は未練残しとり
軍隊で鍛えた声も世が変り
大声で子と呼び露地が昏れかかり
家内中国平安が続く笑い声
産声の大きき一座ホツとさせ
判らん奴やなあと大きい声になり
フグ汁にはてつた顔へ空つ風
みそ汁で顔を洗えと愛のムチ
部屋中にみそ汁の香が満ちて朝
また甘い汁肩書の裏で吸い
甘い汁吸うたら黒い霧がたち

千葉 千梢 美房 白柳 野菜 笑巳代 小松園 笑痴 静歩 千万子 水客 八郎 章雅

横槍がは入り割当てやり直し
割当てで来た五十円赤い羽根
割当てを自腹切る気で飲んでくる
割当てを押し付け気味にもつて
割当てがも一つ欲しい食べ盛り
どこまでも似合ひの夫婦小金貯め
お人好し同士で貧しき道を行く
似合ひ人出雲の神は引合わせ
お似合ふすと呉服屋おいて行き
マネキンが着れば何とよく似合う
金婚の席に似合ひの共白髪

備前川柳社

横山一声報

豊作へ背広を買つてやる話
豊作のこぼれを頂戴するねずみ
豊作に買えと農機をすすめられ
豊年の稲を刈取る菊日和
豊作が続き離農の気を変える
豊作に八等身の家山子笑み
豊作へ女を少しおだてとき
豊作へ行商靴がちびて居り
豊作の稲刈り旅行をする話
豊作へ娘の縁談早められ
豊作を祝つて踊る町の人
豊作にとりの稲が氣にかり
松茸は不作お米を期待する
豊作の田に若者が見当らず
米にするまで豊作は口にせず
新聞とラジオ豊作など知らず
顔刺つて年末迫り来る
豊作だから電化の夢を持ち

幸雄 笑巳代 章雅 義介 一栄 貞九朗 中性尼 文秋 静歩 千葉 静馬 繁志 文平 幸仙 伊久野 秋月 柳子 浄美 飴坊 胡風 宗義 水仙 正洲 一声 芳月 のぼる 久米雄 英子 三六

森下愛 論壇

和歌山短詩型文学クラブ

(三幸報)

釣銭の小銭がなくてまけただけ
袂くそはさんで小銭顔を出し
算盤を又使わせた小銭なり
巾着の紐つめ眉屋の小銭出す
一円貨お金でないと子が取らず
魚屋でもうた小銭すぐ分り
煙草出すたび手に当る小銭かな
日向にて小銭数える背の丸さ
初詣で小銭の山に手をあわせ
小銭でもばかにならぬ子沢山
強盗の記事で女優の年を知り
女優もデコもひばりも思に老け
すて難き声詞女優を思い出し
むすばれたり離れたりと大スター
墨は良し筆も良けれど字は我流
悪筆を墨に負わせて子は帰る
慶弔の外は用なき硯墨
墨で書けば候文にしたくなり

太昭英登榮光康清み蘇園俊勉利公三和泰
 茂津夫衛治郎和ち風光爾晴作幸三
 草高沒良愛夏竹十廿
 右王食子夫論生莊方草
 (二幸報)

富柳会(富田林市)

阿部柳太報

黄には黄の白には白の菊匂あり
うみても汚穢の匂うふしがあり
夫のうそ知る匂いにも白いて秋
匂い袋秘めて茶室の白い足袋
子の匂い妻の匂いの中で寝る
ホステスの素顔に朝日まぶしすぎ
素顔が好きやと心から惚れている
素顔見せぬ姑に嫁肩こらし
其様き母にかえった日の素顔
五十年変らぬ素顔見せる朝
酔えは寝る癖で夫のひとりごと
ひとりごと鏡に云うも女なる
独言いうてパチンコ負けて出る
ひとり言いいつつ買わずいっちょ

大鉄川柳会（大阪市）

白溪子報

調べるだけ調べて予算しぼられる
調べても調べても霧は黒います
大安を調べてだけに買う歴
飲みすぎをしさる暗示の胃が痛み
甘干しをしがめば母の味がする
穏やかに話せば同意してくれる
穏やかな海へ供花のただ静か
穏やかな陽差で小鳥の世話をす
穏やかに話せと金にする心算り

水 萬 一 宗 奮 杜 求 季 漢 柳 東 柳 宏 春 白 花 八 雄 摩 笑 美 吸 美 柳 衣 清 城 善
客 的 求 悟 水 的 女 替 雲 棲 太 子 馬 柳 梢 郎 生 天 癩 代 江 房 太 報 作 治 石 八

珠一つ降ろして仕入れの値がききまゝに生活の程度を示す言葉吐く算盤の端使われなくて用を足し折合もなく人生の旅に発ち反感の目を見られまい窓を向く反感をようやく感じた流行児雑草のように折り合う男なり折り合えぬのを相性と信じきり同僚ですと名士の顔にふり物別れする氣最初の提示額折合いを現代つ娘は氣にかけず含嗽の水吐けばそれきり虫が絶え合格も併せて折る初日の出

むらくも川柳會（島根県）藤

寶石の指輪で人生泣き笑い酒ぐせになれて来たのも三十年走る凶器今日も三面にぎわせる返済のコツも仲々借り上手違反又違反道路は狭くなり返済を終えて裸になった酒どっちみち利のつく金で穴を埋め金利だけ払い倒産意識する返済金忘れた頃に届けられる君もかど違反同志のにが笑い違反せぬ車、次次追い越され返済は出世払いで見込まれ月賦でもいいよと當てにとおぼろげ

水晃白冬紫李緑一一鷄清孝
客男江樹朋之助生郎生泉華

むらくも川柳会（島根県）藤井明朗報

明
朗
報

うろたえて汚職の金を返済し
冬山の魔神にいとむ列づく
冬山へどうぞ無事でと送る母
交通違反もう当局も遠慮せず
大物の違反小さくけりがつき
酒ぐせに苦勞しました追憶記
俺を追うように俺の影法師
背くらべ子供にみんな追いこされ

南海川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

二日酔梯子したらしい土産物
手作りの土産がいちよろこばれ
たくあん土産名張のかえりらし
土産物を忘れ現ナマそっと出し
土産物早く食つてと但し書
参道の土産屋家中総がかり
お詣りに来たのに土産要る近所

八郎 圭水 宏子 和郎 金三 句念坊 貴山

あすなる川柳会 (大阪市)

梅里報

つまみ食いあとの仕末が高うつき
いいわけが通らぬほどに脱線し
肩書が多く本職つかみかね
適当に忘れるというテを覚え
本職へ釘一本も逆らわず
つまみ食いながら豆を煮るママ
うつむけば翡翠は青き愁いもつ
結局は損本職へまたもど
一日は京で遊ばす使節団

百酒 ゆきを 双楽 福郎 弓彦 恵美子 好郎 梅里

川柳あしなみ句会

阿万々の報

ガム噛んで天衣無縫の若さ行く 葉香

税金へ文句をつけたい黒い霧
赤信号ですよと医者も笑うてくれ
宅は喫いません小皿で間に合せ
経験と勘で科学に遠く生き
未経験受けます愛の聴診器
経験の浅さが椅子に落着けず
山の飯戦地仕込の腕で炊き
他人さまの経験とて誰も無駄にせず
経験は問われぬ求人人はなす
瞬間の出来事処置に気がつかず
千分の一が捉えた美のフオーム
その瞬間議事録ちゃんとも云
この他にないよに云うて適任者
適当にやれとも云えずはがゆがり
大根す陽差しへゴソゴソ動く虫

永断 水客 孤逸 紅月 笛珠 奮水 青光 河童 但詩 岳雨 光男 実甫 初甫 客遊子 万的

まるべに川柳会 (大阪市)

川村好郎報

十一月に賞与が決まる良い社運
バー引けて何処へ行くのか十一時
食欲の秋腹が鳴る十一時
空くじなしドロップ一つもらって来
福引のタンスに一人者ちとあわて
よくしゃべるよと自分は棚に上げ
仲人はこんなしゃべりとは云々
おしやべりの効能情報持ち帰
何回廻しても等外ばかりなり
親戚と知らず薩口まだししゃべり

立見 星斗 茂児 美幸 雄康 泉睦 扇里 瓢太 好郎

どんぐり川柳会 (大阪市)

川村好郎報

商売繁昌皆の児にも愛想よし
繁昌を支えるに足る片えくば

岳太 努太

繁昌へ又親戚がたずねて来
精進の和食は老の性に合
外遊にあきて和食の味を知り
繁昌の過去を墓標は物語り
繁昌の針灸明治のままの家
負けん気を出して悠々空の旅
負けん気が弱身見せてる母の文
親類の縁は賀状でつないどき
繁昌も老舗のかげにある強
和食にはやっぱり酒が欲しくなり
床柱和食を讃美する古老
繁昌のおかげ昼も抜き晩も抜き

集一 痴亭 一楽 双子 孝人 弥生 喜風 生路 梅里 好郎

品質優良

タチカワペン



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

デパートの中に居て静か美術展
見るだけよと子に念おして百貨店
テキパキと運ばぬも良し恋の道
百貨店妻のベースでつかればはて
棺桶の世話までは出来ず百貨店
デパートへ吸われようにな入り
デパートで調べた値段と比べてみ
テキパキとキーパンチャーの指の牙
テキパキと保母は巧みに園児つれ
再建へテキパキ首を切る噂
テキパキとボロの出ぬまに善後策
手が三本欲しい特価の品選び
ショッピング楽しむだけの百貨店
百貨店年に一度と奥の手を
見物も結構たのしい百貨店
特売場わが家の予算狂わせる
デパートはいくらと立売りす
テキパキと口で云う程はかどらず
テキパキが過ぎて荒船乗りあげる
ホステスの腕テキパキと客さばき
慰安会酔うたふりしてプロボーイズ
インテリも酔った姿は男なり
心まで酔わしてしまふ伝導師
船酔いも介抱してくれ旅楽し
酔ってくだ巻く女のいじらしさ
再婚も離婚もテキパキやつのけ
デパートで無料の化粧をして帰り

高知川柳社 (高知市)

川竹松風報

棟梁と呼ばれ器用な左きき 古城

茶坊 幽玄 白扇 輝成 和子 浅重 比呂路 鬼遊 史好 敏夫 マサエ 寿美 久郎 義宏 凡々 圭太 竜夫 恵子 森尾 万つき 伍人 一水 梅里 好郎

器用さを妻も認める日曜日
手内職器用な妻がよく稼ぎ
手器用をはめて女房に使われる
指先が器用で手錠はめられる
器用さを器用な姉が嫁き遅れ
生れつき器用な姉が嫁き遅れ
ご多忙と依頼に書いた巻頭語
ご多忙中恐縮ですがインタビュ
繁昌へ食事がずれる小商人
大盛りが人気飯屋の昼が混み
十一月妻の素顔の日は続き
誰れとでも握手マダムの如才なし
秋がそうさすか小川の橋に行ち
油入れる一升瓶と落ちぶれる
代読と語尾は静かにへり下り
妻のあるひとを思う日おもわぬ日
枯れても伸びても困る鉢の松

岸和田川柳会

高橋操子報

見られて意識の汗は放つとかれ
花嫁の汗をみんなで気にし出し
下手でよし責任果す黒田節
遺座分けになって口下手だまっ
特選が一番下手な絵に思え
太陽をさけた木陰に恋があり
太陽は中央に来て蟬しぐれ
海紅蓮に染めて豪快なる入陽
太陽とビール会社が握手した

たけはら句会

山内静水報

時計さん夜も休まず動いてる 清子

たかし 羅春 香洋 香芳 文司 句念坊 勝竜 昌雄 舞子 竹荘 紅雨 白影 竹青 松風

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400-8

寝坊した先生学校でヒゲをそり
早く来いケーキが切なクリスマス
日曜日雑魚も釣れない人の数
そんな気がしてからフツ見写真
どこまでも歩いて行きたい一本道
大らかな笑いの中に友の声
初ボナスをそっくり母に見せ
店員の笑顔にセーター買っちゃい
雨の路ひと濡れて行くおんな
今朝の冷え指先だけで洗う顔
サツと太陽時計台から浮かぶ朝
屑鉄のような単車の事故現場
借る者の弱身天引かれた利子
てのひらと語るひととき君おも
責任を割勘にして庇い合い
明日があるからぐっすり今日を寝る
ひとり言思い直した首をふる
焼イモへ女ばかりの座がはずみ

洋子 浩彦 勝美 浄子 延子 信笑子 万司 憲次 皆無 仙揚 孚彦 菊醉 柳漁 和尾 扇水 よし恵 操子 征坊

同情をしたのを恋と人が言う
 交番の親切特に身にこたえ
 暫くは枯葉狂ったように舞い
 喜んでゐる子に嘘だとも言えず
 明治百年今の平和においつかず
 柔の道やと五段に名を列らね
 十二月タワシ売る人ふと思ひ
 記念日が過ぎて祝の真似をやり
 忘れよと言ふ一言を考える
 花嫁の方が度胸のあるしぐさ
 座室の平和を師走の陽が覗き
 十二月風の重さよ日の重み
 戸を鳴らす風の吹く夜に友来り
 母娘して出た買物の長いこと
 高島田夫の愛を信じきり
 同情をしたのがたり署へ呼ばれ
 よそへやる花嫁姿が惜しくなり
 ホステスが門に構えるボーナス日
 妻それぞれボーナスへ夢をかけ
 残る人残り通夜の灯に語り
 花嫁の涙母の手でふかれ
 皆様の上に当選あぐらかき
 作法などいらない番茶に腰おろす
 先生に出すお便りは辞書をくり
 十二月三十一日あつてよし
 お喋りのくせに好きだと言ふ
 昨日まで頭を下げた人であり
 発車ベル柱の蔭にいる女
 若さとはこれか師走のスキー服
 倅せは皆んなでつくる日々好日
 夜の寒さ睡眠薬は効いてこず

花洞 松門 一無 政己 不路 春動 静志 鬼焼 青の 不居 峯子 房泉 笹舟 泉令 欣詩 清枝 岳恵 澄恵 吞竜 俊健 文晴 輝幸 蘭子 松緑 天石庵 紫苑荘 静水 じこう

駒つなぎ川柳会 (大阪市)

岸南柳報

虫のよい一年願う初詣で
 無神論新年だけは初詣で
 親の愚痴暗着の耳にいい聞かせ
 新年も交りばえせぬドヤ仲間
 お目出度う御座いますと年をとり
 失礼をすれば皮肉な年賀状
 晴れ晴れと新春を迎えた酒の味
 十二月もう新年号を読む終り
 新年の娘に予算けすられる
 初夢を枕の下へ願ひ事
 拍手も今年こそはの初詣で
 新年のハシリが届く大晦日
 終い風呂出て新年の顔になり
 年々に増える年賀を床に置き
 羽織着の主婦新年から過労
 集金も七日十日はメの内
 新らしい年へひそかな娘のプラン
 新年早々税務署に呼び出され
 起きるまでおこすなと寝る三カ日
 初風呂の湯桶の音が冴えている

ふじかけ短詩睦会 (鳥取市) 藤本礎山報

花藤へ今日も五月雨降りつづき
 丹精の甲斐を美事に下がる藤
 新幹線アツと言う間に富士ビッコ
 藤棚に居て藤の佳さよくわかれ
 メーデーをよそに藤棚へ見と遊び
 星のかげ童話幼い日の記憶
 黒いものやっぱ影がうつってる

ひでお 金愚 はや 順三 金愚 喜正 祥恵 順三 祥恵 柳信 喜正 多津緒 多津恵 祥緒 喜正 順三 小路 喜正 南柳 柳正

一政子 昭好 長男 久宏 恵子

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

町崎松区野倍阿
 TEL 5031・5032
 センター寺三ツ町屋豊区南
 TEL 9184

偉大さは恩師のかげに皆かくれ
 影長く早朝母娘が刈り進む
 母こわしかげの表情見逃がず
 短詩会楽しく前夜眠れず
 川柳の中に短詩の良さ見つけ
 社長部長しゃべって会議終りけり
 博覧会儲けるために出す国費
 同窓会竹馬の友へ夜が更ける
 同窓会子供に戻って師をかこみ
 ワンダフル日本の宝富士が見え
 短詩会ライバルみんなつかしい
 言いかねる愛を短詩に預けかし
 会の名はなと父には母聞かず
 三回忌故人偲ぶに酒が要り
 短詩会幸せ満ちた顔が寄り
 顔色で手ぶらのかけを読んでやり

梅野 富夫 征也 民子 貴子 照夫 大治郎 吉春 鎮也 佳女 保仁 克秋 秀夫 礎ノ山

石原伯峯 著

句集 「潮流」

昭和41年12月25日発行 非売品

この句集は伯峯氏の御令聞著子さんの一周忌に際しての追悼句集である。第一章著子遺句抄。第二章伯峯句抄。第三章弔句抄。第四章芳名録となっている。さからえばひきずりこんで潮は満ち

の句から題名をとって居られる。そして 著子

絶体安静続き 夫の愛を知る 著子 死の前日口述による最後の句。十二月二十六日毎日柳壇に掲載。この一句を得たことで、ひとりのにんげんが救われたことを知るや知らずや。

など胸を打つ遺句が二十二句、伯峯氏の短文と共にのせられてあるのが、ことに胸が痛む思いがする。よき追悼句集である。

遺稿編む眠れぬ夜の遠い星 伯峯 枕頭に過ち多き夫として 同

などひしひしせまる句が並べられてゐる。著子さんの御冥福を心からお祈りする。 合掌

浜口志賀夫 著

句集 「鳥羽玉」

第二集

昭和41年11月1日発行 非売品

この句集の著者は岡山県の長島愛生園に居られる柳人である。幼少の頃からの思い出を随筆に書きそれをはさんでの句集である。建築のことには特にくわしく自身の経験から鋭いタッチで多くの句をのせて居られる。

父親の大きな膝は僕のもの 切れ味を小さな指の腹にきき

この島で持たぬと決めたのみも研ぎ 漁り灯に縋りつきたい夜の悶え

看護婦という限界で腕も組み 病葉の生命をつなぐ蜘蛛の糸 鋸の目なら直せも出来るのに

ほんの一部分しか御紹介出来ないが、その心情をうかがえると思う。

序文 大森風来子氏 祝辞 山崎苦菜外氏

(B6 一六二頁)

(清水白柳)

GOLDEN
O.S.K.
の紳士服
スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー

玉造川柳会 (大阪市)

時 二月十日(金)午後六時
題 臨時・指図・皿
所 玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

南海川柳会
時 二月十六日
題 「定刻」「ただし書」「誘惑」
所 ナンバ高架下
親和クラブ

南大阪川柳会

時 二月二十日(月) 午後六時
題 名目・仕草・落目・私生活
所 アベノ松崎町三ノ一〇
割烹 大 萬

川柳家好みの

川柳塔柳篋

一冊 六五〇円
送料 三五〇円

★執筆者から、よくたずねられることに「反響がありましたが」ということである。ウンともスンとも聞かなければ、上の部とおもつては、反響にもよりけり、編集部からお問い合わせするようなのはこまる。

★細心にして大胆！これが編集部の場合、これはビクビクばかりでも本がでないし、といつてなんでもかんでも組みこむとえらいことになる。同人誌の編集ほどむずかしいものはない。

★いい意味での「反響」は別構だが、「反響」といふことは、よほど年輩のはいった人でないと、これはむずかしいことだとおもう。

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳塔 (10句) 西尾 繁選
課題吟 (各題5句以内)

〔倒産〕 木村 淳人選
〔花〕 津 秋六 花選
〔プラン〕 友 調 貞山選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は横書で新かなづかいにしてください。

日時 二月六日 (日) 午後三時
会場 自安寺 (見送さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

本社二月句会

兼題 有 柳 話
「女」 西田 柳安選
「空」 橋高 魚風選
「白」 水谷 許往選
「中島生々庵選」
席題 三題 (題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円
★投票だけの方は切手50円封入

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳塔 (10句) 北川 春 葉選
課題吟 (各題5句以内)

〔冒險〕 仲 どんたく選
〔シヨック〕 森田 若人選
〔青葉〕 木村 千 容選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区巖谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話 大阪 3985 番

3月の兼題 「無 欲」 「ハガキ」
「人 形」 「血 管」

定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料三円)

一年分 千四百四十円 (送料七円)

昭和四十二年一月二十五日印刷

昭和四十二年二月一日発行

大阪市南区巖谷仲之町20番地

全編編集 中島 蓬 太郎

印刷 大陽印刷株式会社

大阪市南区巖谷仲之町20番地

川 柳 塔 社

電話 大阪 3985 番
郵政 郵便 大阪 3985 番

大戎
阪橋

北極星

直営営業所



くまた別	野田阪神	野田阪神	永楽橋	新橋式島	皮橋
ハンヤの食堂	ハンヤの食堂	やわらぎ	やわらぎ	やわらぎ殿	北極星
(641) 551-2	(641) 551-2	(641) 551-2	(641) 551-2	(641) 551-2	(641) 551-2

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬菜 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー